

徳島新聞連載

『天職に生きる』

元 日商株式会社々々長  
(現 日商岩井(株))

落合豊一自伝

+

+

+

+

# 天職に生きる

(1)

## 落合豊一

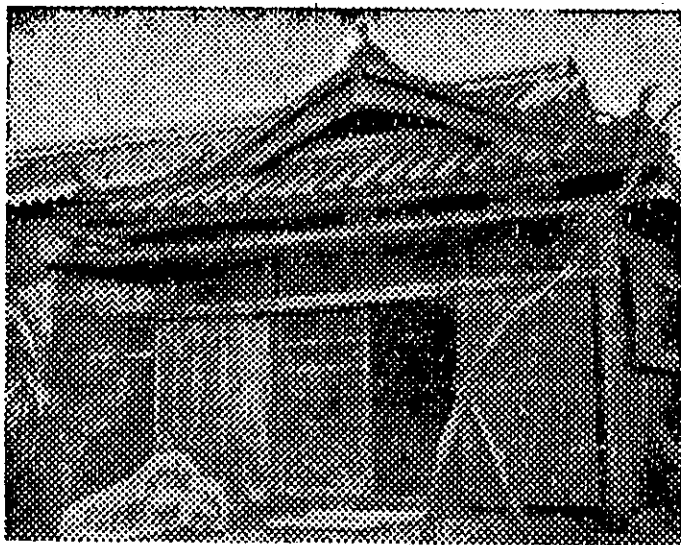


徳島に生をうけ つき進んでこられたということだから、いつの間にか。これから記そうとする想い

やら六十年もの歳月が流れ去っている。昔をしのんでみると、まるで夢のよう。ただ、ただ自身自身の至らなさを、未熟さのみが想い出されて恥じ入るばかりだ。いまさら、自分自身の回顧録などとは、面はゆい感じて筆も遅々として進まないが、ただいえることは、自分自身の進んできたひとすじの道が、私自身にとって、これが天から授けられた道であると信じられ、そればかりを念頭にまっしぐらに

出の数々が、郷里のみなさんになんらかの形で少しでも参考になれば、私の幸いこれに過ぐるものはない。 さて、なにかから話をしよう。 やら記憶をたどるにも、まこと にたどるといふ限りだが...。 まず、眼を閉じると、きのうのように想い出されるのが、私の生れた板野郡北高村宇中村の草深いワラぶきの家だ。 そのころは、農業のほかには藍の大きな蔵の内部に備えられた

する。とりわけ、夏ともなると、寝床で、切った藍を仕込んで酔させているありさまなど...。 ありありと眼にうかんでくる。



私が生れた板野郡の生家だが...六十年の歳月のうちに、住む人も変り、二階建瓦葺の家が建つなど、すっかり昔と模様替えている。

広い庭で、夜通し藍をナタで切っている光景や、またそれらの農家がいすれも蔵をかまえ、その米を買い出し、これを問屋に売

り、いわゆる半農、半商の生活であった。

私の母の名は「あいの」。この名は土地の産物の藍に通じ、また当時女名前のお末尾に「の」の字をつける習慣からきたものらしい。また父は助右衛門という名だった。家計は余り裕福というわけではなく、まあ中流といふくらいだった。

ここで、私の一生にとって切っても切れぬ因縁となっている祖母「キク」のことがなつかしく、またありがたく、よみがえってくる。

昔の人にありがちな中肉中背顔はふっくらと柔和な感じ、いつも慈悲深い眼で、じっと、孫の私を見つめていた祖母。それは私の魂の奥底まで見透しているような眼でもあった。

# 天職に生きる

(2)

## 落合豊一



祖母キクの夫、

もない八月半ばごろの話

私にとって、祖父辰三郎は非常に真面目な正直者で、たえずコツコツと励む人であったらしいが、私が生れてまもないある年の麦の収穫時、妻の穂で、左眼を刺し、ついに失明するに至った。そのせいもあったが、祖母はよく雙眼の夫を助け、真っ先に畑にでて、たゞ黙々と働いていた。その姿がなんともいえぬ尊い姿として記憶に残っている。

その後、祖母の落案で、私たち一家は徳島の前川町に移った。私が小学校に入学してから間

助任小学校に転校した最初のことだ。私を初めて学校につれて行ってくれたのが、ほかならぬ祖母なのだ。そして先生にはも

お陰で私は案外早く、クラスの連中になじむことが出来た。私

きく大将になっていたようだ。当時建築中だった近くの工業学校の広い校庭で毎日、相撲をとったり、またけんかなどして、そのたびに、いつも着物のソデをフラフラにちぎっていた。



確か祖母が六十四歳の正月を迎えたときにうつしたものだ。当時私は助任小学校の二年生ぐらいだった

ちろん、クラス・メイトのこともたちにもいよいよ、鉛筆と菓子を与えて「よろしく、頼みます」と頭を下げておられた姿は私の頭から消えない。こうした

いたし、歩くことにかけては別に苦にもならなかった。すばしこかったこと、また元

「しようのないいたずらっ子が」と両親にしかられても、祖母は「まあ、まあ元気にしたことはないワ、なによりもまず健康じゃテ」といって、つねにかばってくれていたようだ。

こうして、私はますます胸白小僧となっていたが、その代り骨格もみるみるたくましくなり、立派な健康体がかたちづくられていった。そのころである。アジアの風雲いよいよ急を告げ、ついに日露戦争がはっ発したのは……。

(筆者は日商株式会社社長)

# 天職に生きる

(3)

## 落合豊一



召集令状をうけた若者たちが一人、一人タス、手掛けて小学校の校庭に集り、町内の人々の『バンザイ、バンザイ』の歓呼に送られて勇躍戦線に発っていった。

そして旅順陥落祝勝の旗行列に血をわかしながら『ワイ、ワイ』はしゃぎ回っていたことも忘れ得ぬ印象だ。

私はまもなく尋常四年を卒業して、寺島高等小学校の一年生となった。そのころの私はいつも授業を終えて帰宅すると、家業である精米のウスをふんだり、押ししたりするほか、一斗入

の私は家業が忙しいため、帰宅してからゆっくり復習といったことは、ほとんど出来なかつた。



徳商三年のとき、級友たちとうつつす(最前列に居るのが私)

たので、もっぱらノートを使用せず、授業時間中に先生の講義をそらんじてしまう方法を選び、苦勞しながらもなんとかやりとげることが出来た。お

けて成績は首位、本科に進んで特待生となり、授業料なしで第

で、私は得意の背負投げで暴れ回ったものだ。

当時、柔道部を中心とした

あ硬派に属する連中十四、五名

で『鉄脚クラブ』と称するグル

ープを作っていたが、いつだっ

たか、雪のちらつく寒い夜、板

東町の大麻神社へ向け、徹夜

行進を開始した。連中は一本の

長サオを持ち、ねむくなったら

このサオにつかまり、睡魔と戦

うのである。このグループの連

中には元ホルル総領事だった

喜多長雄や、元大日電線監査役

反田喜平、徳島商工会議所事務

局長綿奈部総次郎、現在アメリカ

力居住の梅塚保通諸氏がいた。

梅塚氏は一行のなかでも最も肥

満しており『ソウ』というニック

・ネームだった。

# 天職に生きる

(4)

## 落合豊一



雪の夜の行進で、こどくかけ込み、食うわ、食うは、この「象」君、出發するとわ、漆屋の老夫婦、目をパチクきはなかなかの元気、田舎道を、りさせながら、ご飯をたき出す大声で歌いながら進んでいった。こと三べんにもおよび、最高記ものだが、大原神社につくころ、録が象君の廿一杯。私がこれにから夜は、シンシンとふけわたついで、なんと十六杯も平けたり、寒いこと、心細いこと、このだから、その空腹ぶりが想像の上もない。それに第一、めしされようというもの。私は当時を持たずに行ったものだから「甚五」というニック・ネームまらない。一行グウグウ腹の虫で通っていたが、これは私が柔をならしながら、ほうほうの態道以外に水泳にも自信があったで帰ってきたが、このとき、吉とところからきたものらしい。な野本町あたりで、一軒の茶屋が、んでも昔阿波藩に樺太の森甚五店開きしているのを発見した兵衛とかいう水泳の達人があつたときのうれしき。連中、脱兎のたらしい。

ある年の豊のこと。例のごとく、米を荷車で運搬する途中、前川橋にさしかかった際、ワイ、商業高校を卒業するに当って、



徳商を卒業して三日目、仲のいい「象」君と記念撮影におよんだ。(向って右が私)

ワイ黒山の人だかりだ。のぞいてみると、近所の「よっちゃん」とかいうこともが水の中でアップ・アップだ。すぐさま真ッパカになり、無事救出した

た。助任川でもおほれかかっていた当時小学六年生だった板東定一君を救助したことがある。こうして、夢多き青春の徳島が南洋方面に進出してゴム園を作り、成功しているという話を聞いた。私は矢もタテもたまらなくなって、徳商黒沼校長にこういったものだ。「向って右が私として南洋にやって下さい」といだが、校長先生のお骨折りにかゝわらず、そういった方面の就職口は容易に見つからなかった。私はついにこれを断念、祖母のすゝめに従って神戸高商を受験することにした。

同時に、両親にこれ以上の負担をかけまいと、県からの貧賈学生の資格をえ、無試験制度により首尾よく入学することができた。

# 天職に生きる

(5)

## 落合豊一



神戸高商には、氏と知りあい、同氏の紹介で当

私のほかにもう一人、さきに 時の徳島毎日新聞社の須藤社長 『象』のニック・ネームで登場 から『家庭教師をするのなら世 した梅塚保通君が受験したが、 話しよう』というありがたい話 おしくも不合格。この梅塚君と があり、そのお骨折りで、大阪 はのちにアメリカで再会すると 市東区上本町五丁目金沢種次郎 いういきさつがあるのだが、そ 氏方で、家庭教師となることか れは後日の話として……とにか できた。

神戸高商にバスしたときのう で、郷里の後進のためには学資 れしさはなんにもたとえようの まで出して人材を育成した立派 ないほどだった。 私とはしばらく、神戸高商の近 本人格者。元大蔵大臣藤井真信 くの『聯合館』という下宿屋に 氏を始め、元京大総長島養利三 くらしていたが、ほどなく神戸 郎氏、地方長官をつとめのち 新聞の経済記者である真杉直雄 に三井の社会事業部の主望者と

なった山口安蔵氏など、いずれ も直接、間接に金沢氏の恩恵を こうもっている。 私はこ

で、当時天王 寺中学に入学 早々だった長 子国雄君の勉 学のお世話を しながら、同 家に住込み、 食事、交通費 一切の面倒を 見てもらって いた。その後 国雄君が健康 上の必要から神戸市垂水の別荘 に移った際、私も一緒に転居 したが、いつまでも同家で厄介 しが、静かな環境のなかで、面白



神戸高商三年生当時、新開地をぶらついて その帰り途だった。(向って左端が私)

いほど、勉学にいそしむことが 出来た。生活的にも余裕のない のだ。同時に、卒業論文も書か なくてはならない。私は神戸高 商に在学中の全てを、この論文 に集中しようと、卒業する一年 前から準備にとりかかった。ま ず金沢氏宅を辞して阪神沿線の とある『ナグ』の豪農の門ワキ の一室を借りた。自分だけの勉 強に一心不乱となったのだ。部 屋代が月九円ぐらいで安かった せいもあるが、その一室の隣り が牛小屋で、とき折、牛がバタ バタあばれ、そのたびに、部屋 が揺れ動くが、それさえ辛抱す れば四囲は静かだし、まあ勉学 に大した支障はなかった。

さて、論文だが、どんなテーマ がよいか。私は日夜、そのこと ばかりを念頭においていた。折 も折、世にいう米騒動なるもの が各地に起った。

# 天職に生きる (6)

## 落合豊一

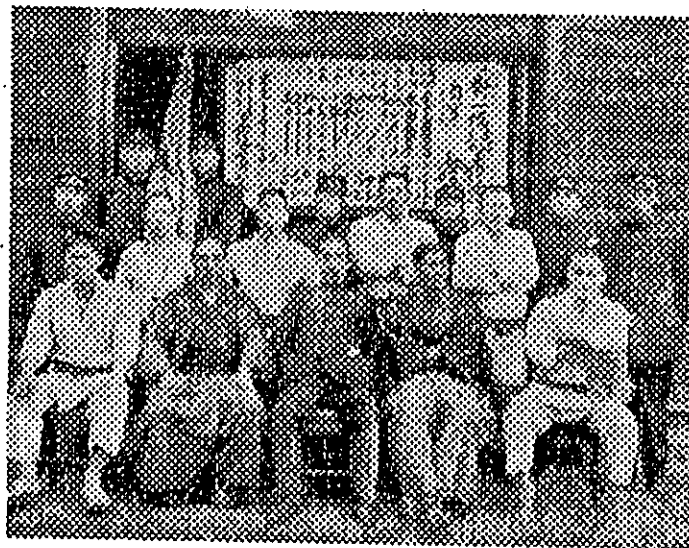


一石に四十五円まで暴騰し、ついに富山県下で地方漁民のおかみさん連がむしる旗を押し立てて、県庁に押しかけるといふ事件が起り、物情騒然、ときの仲小路農商務大臣が暴利取締令なる伝家の宝刀を抜き放つてようやくにして事態の收拾を図つたという時代だった。

もともと米屋のセガレだっただけに、私の米に対する関心は人一倍。「そうだとまず日本を救うは食糧の需給にある」と、卒業論文もこれに没頭しよう

つねに不安定だ。

その点、白色人種が常食とし



半球を通じて年が年中、収穫されていくこの点を参考にすべきだ。との結論に達した。そこで卒業論文にはせひ「小麦」に関する研究を」と考え、文献をひもどいたところ、これが案外少ない。結局約一年間がかりで「日本を中心とする小麦の需給問題について」七

東京高商との柔道対抗戦で、私のいる神戸高商が勝って、その後うつす。当時私(真中の列左から三人目)は初段だった。

ている小麦はどうか、これは米とくらべて比較にならぬほど生産分布が広大な上に、啊、北商た。この小麦に関する研究をし

「小麦」に関する研究を」と考え、文献をひもどいたところ、これが案外少ない。結局約一年間がかりで「日本を中心とする小麦の需給問題について」七

論文も書き終り、いよいよ卒業が近づくとつけ、いままでの学生生活の総決算というワケで、そのころからボツボツ酒をたしなむようになった。もちろん神戸高商時代もずっと柔道部に籍を置き、もっぱら硬派のグループに入っていたわけだが、のめばのむほどに酒が好きになり、かれこれ一升ぐらひは軽く平らげていたようだった。



# 天職に生きる

(7)

落合豊一

正木契村画



卒業前のある晩、徳島県出身はなかつた。

『ばかりで作った『徳島友団』

そのころ神戸

『さかみ回ったあけく、一升

高商では、どう

『提げて独りで帰途についた

節節なるものが

『だが、電車はなく、結局二里

大流行してい

『かりの道をやつとこのことで下

た。もともと歌

『にたどりついたものの、部屋

だけは人の背手

『間違えて牛小屋でのびてしま

であった私も、

『あくる朝、なにか顔が冷た

いきおい覚えさ

『のでふと、眼を覚ますとなん

るをえなくなっ

『ことはない『ウモ』とばかり

た。その当時覚え

『牛になめられていたのだから

ば、その木曾節と

『余くこれくらい驚いたこと

に教えられた『青柳』くらい。

『一次大戦は、猪まもないころ

大正六年の春である。私は

いつもアホウの一つ覚えみたい  
に酔っぱらうと調子外れの高い  
声で歌っていたものだ。  
卒業が間近くなるにつれ、あ  
ちらから、こちらからも就職  
の口がかかってくる。現在の就

で、非常な好景氣、ムコ一人に  
会社が八つとまでいわれた時代  
である。卒業者の全員に対して  
各会社から猛烈な引抜き合戦が  
行われた。ひどい会社になると  
卒業する一年くらい前からレス  
トランや、料理屋にまで学生  
を招待して、強引に就職させる  
例もあり、いまで  
いえはまるでちよ  
っとしたプロ野球  
の引抜き合戦みた  
ようなもの。私に  
対しても同時に神  
戸の鈴木商店と、  
三井物産から誘い  
があった。私は神  
戸高商時代の恩師  
津村秀松教授のす  
めにしたがって、鈴木商店に  
入社することとした。



鈴木商店に入社すると同時  
に、まず外国通信課に勤務し  
た。ここでは世界各地に散在し  
ている出張所や、支社との間の  
通信などについて連絡をつづけ  
ていくのである。三ヶ月のの  
ち、こんどは受渡部に回され  
た。ここでは主として倉庫係を  
やらされたが、これがなかなか  
かどうして、なれるまでが大変  
なのである。毎日人力車に乗っ  
ては倉庫回りをするのである。  
そして、入庫の数と、帳簿上の  
数が間違っていないか、一々チェ  
ックしていくのだ。当時電気銅  
の輸出が非常に盛んで、倉庫の  
中にはいつもギッシリ電気銅が  
山積みされていた。

# 天職に生きる

(8)

落合豊一

正木契村画



電気銅の計量

ない」とものす

をするときに、その桿をきめる さいけんまく  
 方法が非常にむずかしい。初心だ。結局、こ  
 者の私にとってはつきからつき の倉庫係を三か  
 へと目にもとまらぬ早業でデキ 月ばかりやった  
 パキ処理されていくのを見る が、どうしても  
 と、果してこれで正しいのか、 熟練の域まで達  
 どうかトッサには判断しにく しなかった。そ  
 い。「ちよっと、いまのところ うこうするう  
 姿だからもう一度やり直してく ち、突然八月半  
 れ」なんていうもんなら、涙の ばのひる下り、  
 荒くれた仲仕たち、眼をむい 支配人室からの呼び出しがあっ  
 て「一々、そんな悠長なこい た。「一休何事だろ。なにか  
 うとったら、仕事もなにもでき お叱りでもうけるのか」半信半



疑で支配人室に入った私に下さ  
 れたのは、なんと「海外派遣」  
 の命令なのだ。そのときの喜  
 び、いまに至るも到底忘れるこ  
 との出来ない 感激の一瞬だっ  
 た。しばしばう然としている私

の成績が一番いよので、ニュー  
 ヨークでも、ロンドンでも好き  
 なところをいい給え「瞬間、私  
 は「一休どこにしたものだろう  
 か」としゅんじゅんした。しか  
 し私の脳裏にひらめいたものは  
 華やかなニューヨークでも、ロ  
 ンドンでもなかった。そこには  
 おびたどしい小麦  
 の山積された小麦  
 の一大メツカ、北  
 米シヤトルの姿が  
 浮かび出てきたの  
 である。神戸高商  
 を卒業するときか  
 らの念願「小麦問  
 題」と力の限り取  
 組みたいとの熱情  
 がうつぼつとして  
 の成績が一番いよので、ニュー  
 ヨークでも、ロンドンでも好き  
 なところをいい給え「瞬間、私  
 は「一休どこにしたものだろう  
 か」としゅんじゅんした。しか  
 し私の脳裏にひらめいたものは  
 華やかなニューヨークでも、ロ  
 ンドンでもなかった。そこには  
 おびたどしい小麦  
 の山積された小麦  
 の一大メツカ、北  
 米シヤトルの姿が  
 浮かび出てきたの  
 である。神戸高商  
 を卒業するときか  
 らの念願「小麦問  
 題」と力の限り取  
 組みたいとの熱情  
 がうつぼつとして

に、支配人はこういった。「こ  
 わき出てきたのだ。  
 「世界一の小麦生産地である  
 外派遣させることにしたが、君  
 シヤトルにやって頂きたい」と  
 田のタキシードをも注文した。

その当時、私の月給は十五円  
 也だったが、海外派遣の仕度金  
 として支給されたのがなんと六  
 百円也という大金。私にとって  
 は生れてこのかた握ったことも  
 ない大金だ。さっそく神戸元町  
 のナンバーワンといわれる「柴  
 田洋服店」に押しかけて「とに  
 かくアメリカに行くんだから、  
 とび切り上等の服を頼む」とい  
 うわけで、一着四十円もする背  
 広を春夏秋冬各一着と合計四着  
 注文、さらに「アメリカ行きの  
 船の中では晩飯の時にタキシ  
 ードを着るのがエチケツトだ」と  
 いう先輩の言葉を信じて、五十  
 円

# 天職に生きる

(9)

落合豊一

正木契村画



年若かったせいを中心に通日連

もあるが、私は有頂天、栗田洋夜、神戸のさか

てすました顔付で「メーシヤ」とな

「を」とらしていたようで、そ

当時の光景がいまもまざま

「思ひ出されて自ら微笑を禁じ

はない。さらにこんどはカバン

。大きなカバンに、中のを一

「さらに手揚げといずれもリ

「ウとした本皮カバンをあつら

「また靴も三足ばかり注文し

「が、まだ金が十分余っている

「だ。あげくの果ては渡航組ら

るまでに女遊びをする必要あ



「ということだけは確かなことだ  
ったのだが……。」

食に六人が六人もさっそうと  
タキシードを着込んでいったま

り」と力説するのだ。さて、そ

秋もようやく深まった大正六

ではよかったが、スナリと食堂

の結果がどうなったかは想像に

年の十月下旬、こうして私は二

を見渡してもタキシードなんか

まかせるとして……とにかく私が

ニューヨーク行き二名、ロンドン

着込んでいる連中はまれ、殆ん

いよいよ神戸駅を出て、横浜港

三名の同僚たちとともに、横浜

どが平常着のままなのだ。あと

からアメリカに向おうとする最

港から伏見丸(二万ト)船上の人

で判ったことだが、イギリスな

後の夜、さかんを見送りでご

となった。初めて日本を離れて

とヨーロッパ向けの航路にはタ

海外に渡航すると

キシード組も多いが、自由の天

いう喜び、真膏に

地アメリカ向けの航路ではそん

すみ切った果しな

なに形式張っていないとのこ

い大空に大海原。

と。いずれにしても、みんなな

私たちはただ興奮

らシロシロ見つめられているよ

と感激で、新たな

うだし、とうとう四日目の夜食

勇氣に身体がうち

からは平常着に換えるというこ

ふるえるのを覚え

とになった。同僚たち、五十円

るようだった。た

也でタキシードを新調したこと

だ船の中で「ちよ

をぐちることしきり。

と馬鹿を見たな

こうしていろいろな思ひ出を

あ」と感じたのが例のタキシ

のせたまへ、船はやがて私にと

下のと、出発前の先輩の言葉を

ってのあとがれのマチ、シヤト

思ひ出してさっそく、最初の夜

ルに静かに入港した。

# 天職に生きる

(10)

## 落合豊一



当時、シヤトル いまちょっと、女事務員たち

ル市は人口約卅万人、時あたかも第一次世界大戦中のことで、とりわけ諸物資の輸送上、極めて重要な地に当るだけに、その美入とはいえないが、氣立ては股盛ぶりも相当なもの。各国の有名商社の出張所、支店が自由押しに並んでいる。そのシヤトルの港からほど近いファースト・アヴェニューという街の一角、六階建のクルマビルディングの三階が鈴木商店の出張所だ。所長は勝屋利秋氏、さらに所員には木村謙三、戸田正太郎氏と、アメリカ人のエバンス（ワシントン大学出身で、当時卅二歳）がおり、そのほかに外人の女事務員四名がいた。

事務所があった日本郵船の若い出張員とちょっと関係が出来て



シヤトルに着いた翌年の四月九日、所員ならびに同ビル内の連中らとうつす。前列左端がライス嬢、中列左から二人目が私、その隣リヌーナ嬢、さらに勝屋所長、ランデック嬢、エバンス、戸田氏の順。後列右から二人目ファース嬢。

またカチカチのクリスチャンだった十八歳の「ヌーナ嬢」は、いずれも生粋のアメリカ人で、ともにちょっととした美人だった

知って、以来あまり親しくはならなかった。のちに同ビルに

一ドルは日本円に換算すると二円ぐらいたが、生活は本當にラクなものだった。どんなにせいでいっても毎月百ドルは軽く残っていた。そこで、氣も大きくなりシヤトル市で二番目といわれる「フライホテル」という留としゃれこんだ。宿泊費毎日五ドルというんだから大したことがあるまいと多少あまく見ていたんだが、……泊ったその晩からなんのことはない失敗の連続。掛布を一枚めくって、寝ることになってるのに、こいていねいに掛布をベッドに重ねたその上から寝たり、朝は朝で、日本のみそ汁を飲むような調子でスープを注文して、ホテルのボーイに笑われたり、きんさん。やはり田舎者は田舎者らしく安宿に落着かないと、第二層がこつて仕方がないと、つくづく思

いた十七歳の「ファース嬢」、二百ドルを支給された。当時の

# 御土立志傳

## 落合豊一氏の巻

# 天職に生きる

(11)

## 落合豊一



フライ・ホテ 戦条約が結ばれたからなのであるにしゃれこんだものの、結局 すなわち、この日まで小麦は食料代その他がかさんで、滞 および小麦粉が輸出禁止品として仕費、十日間で百十ドルにもな ったので、始めの元氣はどこへ へら、とうとう退却？その後は 第一船として七千ト満船で、 他の所員らとともに安アパート の共同炊事におよんだ。

そして私が、学生時代からの 高願であった「小麦」と正面切 った取組んだのは、この安アパ ートでの最初の一年が過ぎて翌 年の十一月九日を迎えてから、 うちのことといえよう。なぜな かのこの日、第一次世界大戦の休

日本にとって最初の小麦取引と 挙がなされた。実にこの試みが なったのである。

その夜、私たちは久し振り に、さゝやかながらも祝宴を張 った。たれいとうなく「日本人 街で飲む」というわけで、 ソロソロ日本人街にくりこん

だ。そこは目抜き通りから、ちよ っとはずれたところだが、千戸 囲碁クラブなどもあり、行く先 先の店先きではほのかに日本情 緒の香りがたよっている。



部屋代は安かったが、なかなかどうして立派なアパートで、シヤトル駐在中、ほとんどのアパートで生活し、思い出も多い。

ばかりもあって、結構にぎやか だ。なつかしい、にぎりずし、 ク、ファース、ライス、ヌーナ

興にのり始めてくる。

そうなると、私はうんざりだ。 ウォールフラワー(壁の花)とお 嬢さん方からアタ名される通り 全然踊れないからなのだ。と、私 と同じように独り浮かぬ顔して 床柱にもたれてる男がいる。

なんとダンスが最もとくとい われるアメリカ生れの二世、ス タンフォード大学卒業の戸田君 ではないか。

「どうしたんだ、気分でも悪 いのか」と聞いても、ただ「ノ ー」「ノー」と首を振るだけで 全く元氣がない。こりゃ、どう も様子がおかしい。日ごろ好感 をもっていた戸田君の素振りだ けに私も気になってきた。それ に、ダンスばかり興じて、私も いささかこの場のフニキから 逃れたいという気持もあったの で、これをしおに、ムリヤリ彼 をうながして外に出た。

て、久方振 りのスキ焼 パーティ だ。酔うほ どに「土佐 節」「デカ シンシヨ節」 などがくし 芸がとび出 してくる。 私もとく いりの「青 柳」をうな り出した。

ン嬢などを中心としたダンスが

# 天職に生きる

(12)

落合 豊一

正木 契村 画



淡い月光をあうな荷物をつんで、雨にぬれなびながら、人通りのとだえた日 本人街のたんたら坂まできたとき、突然戸田君が立ち止った。そして、私の手を握りしめながら「ミスターオチアイ、聞いてくれ」と泣き出さんばかりの表情だ。

話を聞いてみると、こうだ。ことしの暮、シトシトと、雨の降り出した日暮れどき。戸田君が自炊用の輪詰や、食器を買おうとしてこの坂まできたのだそう。すると、自転車が山の上

夢中一

ところがである。キクさんの両親は戸田君の出入りを全然歓迎しない。

うなものだったのだ。その場はとりあえず元気づけたいながら、宿舎に帰ったのだ。思案もない。

上もない。そのうえ、気短かですべて物事はテキパキ、ハッキリ決めないと気が持たないという性分。



迎しない。キクさんには商売の取引きに便宜を計ってくれるシヤトル横濱間の日本郵船の若い船員某氏をムコにと、早くから決めていたというのである。綿々たる彼のナヤミとはこの

そここうするうちに、戸田君とキクさんの仲はいよいよ親密の度を加え、とうとう勝屋所長の耳にも入った。ところがこの勝屋所長、れっきとした江戸旗本の流れをくみ、固いところ

「キクにはもうムコがきまっています」ときた。「サア大変、勝屋所長、オレの顔をつぶしたとばかり、「てめえのところの娘なんか、金輪際もらうものか、ほかにも女はあるワ」と、とくいのへらんめえ口調でまくし立て、とうとう談判は決裂してしまつた。

「キクさん、さもなくばハッキリ別れる」というわけで、さっそく「浜田屋」のおやしさんを事務所に呼びつけた。そして「うちの戸田君と、キクさんを結婚させる」と一方的に切り出したのだ。ところが「浜田屋」さんもなかなか固で、「キクにはもうムコがきまっています」ときた。「サア大変、勝屋所長、オレの顔をつぶしたとばかり、「てめえのところの娘なんか、金輪際もらうものか、ほかにも女はあるワ」と、とくいのへらんめえ口調でまくし立て、とうとう談判は決裂してしまつた。



# 天職に生きる

(13)

## 豊合落一



『余うな』と 的にきめ

いわれば、よけい会いたくな つけるも  
るのが人情で、談判決裂以来、 のではな  
戸田君の恩慕の情はいよいよ つい。あく

のるばかり、一方キクさんも、 まで本人  
戸田君の熱情と、両親の気持 同士の気  
の間にはさまって、とうとう服 持を尊重  
毒自殺を図り、危く一命を取止 すべきだ  
めるという騒ぎまで引き起すに 所長が一  
至った。私も親友として、もう たん切り  
だまっておれない。

『とにかく、オレにまかせろ』  
と夫みえ切り、まず勝屋所長  
にかけ合った。  
『恋愛というものは、そう一方



キクさん直前、日本街の道で、  
日本人街の道で、  
日本人街の道で、  
日本人街の道で、

そのとき  
の仲人役  
はもちろ  
ん私。こ  
のとき私  
はまだ廿  
四歳で、  
独り身。  
以来現在  
までに廿

出して断わられたからといって  
そのムキになって反対するのは  
おかしい。とにかく所長はこの  
まま黙っていてくれ、あとのこ  
とをボクにまかしてほしい!』

との返答。  
そこで、こんどは『浜田屋』  
のがん固親爺をくるときにかか  
る番。『娘さんが自殺を図ろうと  
するほど、こんなにもお互い好

数組の仲人役を引受けたが、考  
えてみれば戸田君の仲人役の  
始まりともいへるべきだ。  
一方、仕事の方も次第に大規

き同士になっているのに、何故  
反対する。娘さんのことを思う  
なら戸田君と結婚さすべきだ』  
……談話談判教時間にもおよび、  
さすがのがん固親爺もとうとう  
納得、ここに戸田君は念願の恋  
愛結婚へとゴールインできた。  
そんなとき、われわれの仲間  
のうちでは日曜とか、その他の  
休みを利用して『ゴルフ』に興  
ずるのが、ならい、となって  
いた。  
もともと、シャツルはメキシ  
コ暖流の影響があつて、冬でも  
案外暖かく、雪もめったに降ら  
ぬという好環境だが、その代り  
十月から三月末ごろまでは、ほ  
んど連日のように雨か、キリ  
に見舞われ、反対に四月から九  
月末まではおよそ雨には縁遠い  
ような好天気の間。そこでこ  
の四月から九月にかけて『ゴル  
フ』が大流行するのである。

# 天職に生きる

(14)

## 落合豊一



シヤトル市周をしていないものがやると、ど

辺の「ゴルフ」場は、そのころこにタマがとぶか、見当もつか排日的な空気がほとんど全部す、危いこと、他人に迷惑のかが日本人の出入を禁止していかること、この上もない。何こた。そこで、われわれは日本人とによらずやり出したら人に負の使用を許可しているシヤトルけるのがきらいな私はそこで一市に、たゞ一つの市置「ゴルフ」計を考え出した。

「ゴルフ」場に日参するよりほかにみちがなかった。だが、われわれはそんなことには一切お構いなく、せっせと通いつづけた。ところがこゝばかりに、日本人がどっと押しかけるものだから、なかなか順番が回ってこない、たまたま順番がやってくるまで私のように全然手ほだきのレッスン

だ。私はわが意を得たりとばかり、ものの五ヵ月ぐらいいも通いつづけたか。「ゴルフ」シーズンも終ろうとする九月中ころ、所員や同じビル内の腕自慢らして、タマを打つのと違つて、一日「ゴルフ大会」を闘い中「あいつ、いつの間練習しておったか」とくやしがること。私はその当時の痛快さが忘れ得ず、いまに至るもヒマと余裕がえあれば阪神近郊の「ゴルフ場」に通うというありきまで、一かどの「ゴルフ狂」になつてしまつたようだ。



背負投げの腰のヒネリで、見事一等をかちえた当時の私の「ゴルフスタイル」。まさに得意満面？というところ。

私の「ゴルフ」はあくまで自己流だった。ほかの連中のようには、大きくバック・スイングして、タマを打つのと違つて、だ。私はわが意を得たりとばかり、ものの五ヵ月ぐらいいも通いつづけたか。「ゴルフ」シーズンも終ろうとする九月中ころ、所員や同じビル内の腕自慢らして、タマを打つのと違つて、一日「ゴルフ大会」を闘い中「あいつ、いつの間練習しておったか」とくやしがること。私はその当時の痛快さが忘れ得ず、いまに至るもヒマと余裕がえあれば阪神近郊の「ゴルフ場」に通うというありきまで、一かどの「ゴルフ狂」になつてしまつたようだ。

◇ ◇



# 天職に生きる

(15)

## 落合豊一



山田一郎 ばあちゃんだ。なんでも昔は東氏は神戸高商出身で私より五年先輩、ところがこの先輩、なかなかの粹人で、自分で三味線をひくというほどの通。

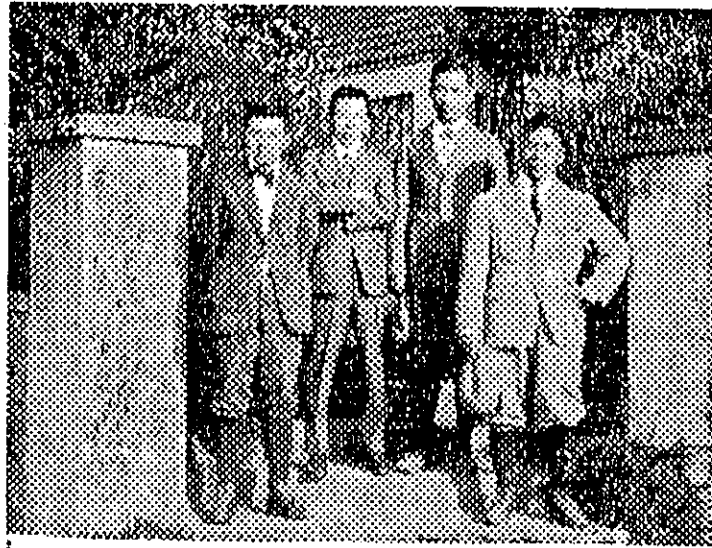
私は山田氏と、さらに私より一年遅れてシヤトルに赴任してきた後輩の島崎隆雄君と三人で唄の練習を始めた。毎日仕事を終ると、三人つれだって日本人街の方に出かける。そこのある居酒屋で、ドロクを一杯ひ

っかけて、ほろ酔い機嫌のまま日本人街の唄のお師匠さんを訪ねるといづくだりになる。

このお師匠さん「瀧元延栄」といって、もう六十くらいのお

に始まって、「梅にも春」「春雨」などと、出ないカスレ声

お師匠さんから私と島崎君の二人にも「なにか一つ、独演しなさい」との話があり、下手くそ同士どうせやるならうんと大作をと「よせばいいのに、私が瀧元の「保名」で、島崎君が常磐津の「将門」と大見栄切っ



日曜日の朝、さてこれからどこへ行こうかとアパートの前に勢ぞろいしたところ。向って右端が私で、左端はエバンス氏、左から二人目は戸田君

私は入門の早々「長唄を教えてください下さい」といったところ、

「まず、端唄を十ばかり覚えなさい」というのだ。

また一杯引っかけるとドロクの味もまた格別だった。

そこで、私は島崎君と、新米の弟子入りよろしく「秋の夜」

をむりに張り上げて精進におよんだ。

もうとも、唄には自信のない私ら、一向に上手にはならな

さて、いよいよその当日は、私ら二人はまず元気づけにドロクをと、例の日本人街で飲み出した。最初のうちは一杯だけと思っていたのに、飲むほどに興が出てきて、とうとうへべれけ。私たちは借りものの紋付き、角帯をせわし気に着込んで、あわて「タクシーを拾い、会場である「日本人会館」へとくり込んだ。会場はもうギッシリと満員、新婚早々の戸田君とキミ子さん夫婦も来ているはずだ。

表会」がやってきた。

# 天職に生きる

(16)

落合 豊一

正木 契 村画



待ちかねたよ うなってきたのだから世話は  
うに、お師匠さんが「さあー早 ない。だが、私たちは冷汗タラ  
く、あなたたちの出番よ」とう タラだ。ほうほうの態で「発表  
ながす。 会」を終えたが、そのときの舞

観客席からは割れるような拍 台の長かったこと、いま思い出  
手がわき上る。だが、私も島崎 してもソツとする。

君も酔眼もろろうとして、サ 「ミスター落合の渣元、ワン  
ッバリだめ。独りでうならねば ダフル」と、妙なところで、戸  
ならぬのに文句が一つも出てこ 田君にひやかされながら、やっ  
ない。「ミスター落合」戸田君 とのことアパートに帰ってみ  
夫婦の懸命の声援にもかかわらず、女中さんが「お客さんが  
ず、なんのことはない私の場合 待っていますよ」という。

も、島崎君の場合も結局は三味 「それだろう？」私が部屋に  
線をひいていたお師匠さんが、 入ると、一人の巨漢がヌーと現  
ほとんど全部といていいほど われた。

だ」久し振りの再会に、二人は 学資ぐらいはなんとかしてやる  
夜もすがら語り合った。 う」

「オー、ソウ(象)君じゃない 聞けば、ソウ君、慶応大学卒  
か」私は驚いた。徳商時代の大 業後、郷里の富家から学資を出  
の仲好しで、ともに神戸高商を してもらい、コロンビア大学に  
受験したが、彼だけは惜しくも 入学したのだが、三月もたたぬ



不合格、以来慶応大学に進んだ うちに、その富家が没落、現在  
ということは知っていたのだ は食うや食わずの苦学生生活をつ  
が、いま、こんなところで会お づけているという。

「驚いたなあーどうしたん するな、大したことは出来ぬが

私はハッキリ約束した。そし てそれから後も私は毎月百ドル  
ずつの学資を送ることを忘れな かった。私の給料は毎月二百ド  
ルぐらいたったが、百ドルもあ れば毎月ラクにくらせていたの  
で、残りの百ドルを彼に送って もそう生活には困らなかつた。  
彼の喜びは想像以上だった。こ れは後日の話になるわけだが、  
結局私は三年間、彼の学資を送 りつづけ、卒業後も私の取引上  
で知っていたポートランド市の 中田商会(徳島県の出身者で木  
材問屋)に就職をあっせんした。  
現在、ソウ君はロスアンゼルス  
で、相当手広く木材業を営んで  
おり、折につけ、私に手紙をく  
れたり、珍品を送ってくれたり  
して、そのたびにいつも私はう  
たた懐旧の念にかられるのだ。

# 天職に生きる

(17)

## 落合豊一



シヤトル時代　しゃべれない。しゃべれないとの私は、仕事のないときはゴルフ、小唄、端唄などで英氣？を養ったものだが、さて仕事となると、私は死物狂い。いつも小妻取引所の相場とにらめっこしながら鋭いカンのあけくれを送っていた。こんなとき、一番困るのが外人相手に取引上、口論するとき。

普通の会話なら、どうにか意味だけは通じるようになっていたが、さてケンカとなると相手に負けまいとするアセリばかりが先きにたつて、思うように

こういった日本とアメリカと違うような国産の違ふもの同士いし、自分の胸の中もスーとしたの商取引だけに、コトバ上のけてくる。大抵の外人さん、しまんかや、くい違ひなどという



鈴木商店シヤトル出張所の内部　右が私  
で各商社への引合い書類をしたためている  
ところ、左側には戸田君が座っていた。

ことはしょ  
つちゅうの  
こと。とこ  
ろが、これ  
が商売上の  
契約とか、  
取引上に手  
違いがでて  
くると、こ  
れは大変  
で、とんで  
もない失敗  
をやらかす

いには眼をパチクリ、こちらの  
怒声に押されてしどろもどろに  
なってくるのがオチだった。  
二年目のこと、とんでもない大

失態をやらかし、一時は本當に  
腹でもかき切っておわびしよう  
かと真剣に考えたほどのことが  
ある。

というのはい……

ちょうど、勝原所長が本國に  
出張してルスのとときであった。  
當時は世界大戦の影響をうけ  
て極度に鉄が不足していた時分  
だ。なにしろ造船しようとして  
も鉄がないのでどうしようもな  
い。それこそたれも彼もノミと  
り眼(まなこ)で必死に鉄をあ  
ぎっていた。もちろん各國とも  
いずれも鉄の輸出は禁止して  
いる。

私は小麦部門を担当していた  
が、同時にそういう情勢下だっ  
ただけに鉄関係についても担当  
を命ぜられ、たえず鉄の買付け  
についても眼を光らせていた。

# 天職に生きる

(18)

落合 豊一

正木 契村 画



そんなある日、突然カナダの  
一商社から「鉄の売物約二万ト  
があるが、どうか」という引合  
いが届いてきた。

鉄関係を兼任しているとはい  
え、あまり深くは専門知識もな  
かったが、とにかく鉄不足の時  
分、降ってわいたような良い話  
だ。「こんな巧い話はまたと  
ない。絶好のチャンスだ」とば  
かり、実のところ、私だけでな  
く所員のたれもがおとりする  
ほど喜んだものだった。

「だが、待てよ。手放して喜  
ぶのはまだ早い」

十日間以上もかかるといふあり  
さま。そのうち、カナダの商社  
からは「とにかく早く取引をき  
代金の信用状を組んだことのみ  
とにかくこういう時期だ、買っ  
てさえおけば損はあるまいと私  
は決心した。たゞ、先方の強硬  
態度からやむなく契約と同時に  
物がくるかと思うと気になって  
夜もなかなか寝つけない。なに  
しる鈴木商店に入社して以来、  
初めて自分だけの責任で取組ん  
だ一世二代の大仕事だっただけ  
に、私も必死だ。一口に二万ト  
といっても五十ト積み車の車前だ  
と、延々四百面にもおよぶほう  
大なものだ。私にとっては血の  
出るような三日間がつよいだ。  
三日目の朝、まだ寝床にあった  
私の耳許に、突然戸田君のすっ  
とん狂な声が響いてきた。

「落合さん！ 汽車が着きまし  
たヨ」



他の資料を折返し取り寄せ、十  
分検討しつくした。だが、あら  
ゆる角度から調べてみても一点  
非の打ちどころもない。「よ  
し、これなら絶対大丈夫だ」私  
は確信が持てた。同時に本社に  
対しても、指示を待つ旨の至急  
電報を打った。ところが、当時  
の電報にはやたらに検閲時間ば  
かりが長くかゝって、かんじん  
の返信をうけとるまでには往復  
の返信など待っておれない。

「まつの不安だったが、こ  
れとても当時の状況下では方や  
むきえぬ処置だった。

「私がばと、はね起きた。そ  
のまま転げるように、シャトル  
・ステーションにかけ込んだも  
のである。」

# 天職に生きる

(19)

落合豊一

正木契村画



延々長夕、四 我には判らなかつた。とてもち  
百両の貨物列車がいましもシヤ よつとやそつとの弁償ではこと  
トル駅に着いたばかり。私は真 すまない。私の一生も終りだ。  
一文字に貨車にとび移つて、む そうだー死んでおわびしよう。  
さばるように鉄片を拾い上げ 私は真剣に死とうことを考え  
た。ところがどうだ。私が想像し た。もうどうにもならぬ瀬戸際  
ていた鉄とはまるつきり違ふ。 に立たされたのだ。

鉄は鉄でも、たゞ鉄と名がつく 顔面そう白となり、私はいつ  
だけ。クス鉄をたどくつつけ合 までも鉄ツブの中にうすくまっ  
わしただけのことではないか。 ていた。瞬間、祖母の慈悲深い  
手にとつてみると、バラバラ崩 眼差し、両親のさびしそうな  
れるようにこわれてしまう。 顔、顔がぐるぐると去来してく  
る。  
『しまったー』私はへなへな とその場に座りこんでしまっ  
た。目の前が真暗だ。何故こん かれ、ハツと気づいた。  
な大きな手遣いが出来たのか、 戸田君に島崎君、それにミス

ていなくて逃避するなんて男の だ』と大声で叫んだ。みると、  
することか。なんとか打つ手は Xパーセントを超えざる。(not  
hole than X%)とぼつか Hole than X%)とぼつか  
り早合点していたのに、なんと Not less than X%』  
『Xパーセントより少い』とな っているではないか。  
『なるほど、何故ここに今日 まで気がつかなかつたか』と、  
じんだ階んだが、もうあとの 祭り。



責任があります。なんとか良い 握りしめたのである。  
方法を考へてみましょう』と、 事務所へ帰つて、もう一度シ  
手をとらなければかりに訴えている カゴから送ってきた分析表を調  
のだ。 べてみた。どこにもおかしいと  
『そうだ。死ぬなんて考えた ころはない。』と、戸田君が分  
オレはバカだ。まだ責任も果し 析表の1か所を押えて『こつ  
た。なぜならシカゴの商社がし たように、同じような方法で、  
分析表をつけて売りに出すと同 時に、ニューヨークの一商社も  
また私と同じように眼の色かえ てとびついてきたからだ。

# 天職に生きる

(20)

落合豊一

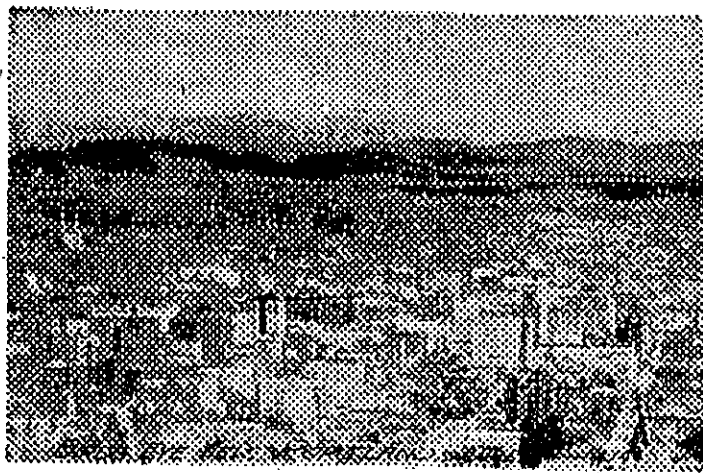


大正九年の市「ポートランド」に出張所を  
春、勝原所長が日本の本社に転移した。

勤したあとをうけて、思いもか  
けず、若輩の私がシヤトル出張  
所長のイスに座った。当時満廿  
五歳になったばかりで、これに  
はいささか驚いたが、本社では  
とにかく小麦の取引高を一層増  
加せよとの託宣なのだ。私は  
新たな勇氣でふるいたつ思いだ  
った。

まず、私はシヤトル市よりさ  
らに、小麦および木材など重要  
物資集散の大きな都市に出張所  
の主力を移すべしとの見解か  
ら、強引にオレゴン州第一の都  
市、ポートランドはコロンビア川  
の上流、百十哩に位置し、別名  
を「ローズ・シティ」ともいわ  
れるほど街中至るところに、パ  
ラの花が咲きみだれ、本常に美  
しい街。山はなく、人口は当時  
廿五、六万といふだった。

上流のワシントン州、アイダ  
ホ州、オレゴン州各地域で産出  
される大量の小麦がこの街に集



「ローズ・シティ」とも呼ばれる美しい  
ポートランド市の全景。出張所はずっと  
左端の方にあった。

大河コロンビア川の流域にはい  
るところ、製材所があつて国  
内および輸出向の産買の中核を  
なしていた。  
いわば小麦および木材関係の  
取引にはもつ  
てこの地理  
的条件を備え  
ているのだ。  
だが、こゝ  
で考えねばな  
らぬ問題があ  
る。それは商  
売に勝つため  
には他の会社  
と同じような  
やり方ではダ  
メ。つねに一  
歩ききんする  
積込みを待つて停泊しているの  
もつと進歩したすぐれた取引上  
の技術がありはしないか、再検  
討してみる必要が大いにあると  
考えた。同時にあらゆる角度か  
ら研究をしつづけたのである。

荷され、大製粉会社で豊盛な小  
麦粉が製造されていく。またポ  
ートランド市の中央部をよぎる  
してもムダなところがないか、

ところが、習慣というものは  
恐しいものである。長年同じこ  
とばかり繰返していると、どう  
してもマンネリズムにおちいり  
がちで、なかなか現状から脱皮  
するということがむずかしい。  
その簡単なよい思索も浮かんで  
はこないのだ。  
そんな日がつづいたある朝、  
私はふとコロンビア川の方に  
向いてみる気になった。そこに  
は鈴木商店が代理店に指定され  
ている国際汽船のK号が小麦の  
積込みを待つて停泊しているの  
である。



# 天職に生きる (21)

落合豊二

正木契村画



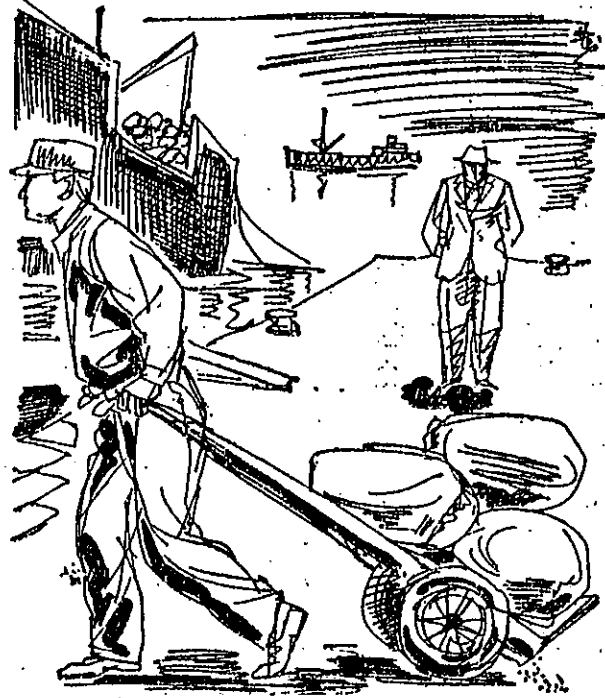
国際汽船のK号は折から小麦の積込みに大わらわの態だった。車のうしろあたりからバラバラと小麦がもれ出しているではないか。それもみんながみんな、バラバラ小麦をまき散らしながら運んでいるのだ。

威勢のいふ沖仲士がつきからつきへと小麦をつめた大きな袋を手押し車にのせて、せっせと船に積みこんでいる。私はふと少年時代、家の商売で米袋をか

ついでいたことを思い出してちよっとなつかしい気にもなった。……

ところが、ふと気づいてみる

全部、新しい袋を使用せず、すでに一回か、二回使ったことのある「ニアキ」「ニアキ」の古袋を使用するのが普通となっていた。なるほど、瞬間、私は自分ながらうかつなことをいっただけだ。あんな調子では恐らく日本に着いたときも同じことだろう。わずかなことだと思っ



「なるほど、瞬間、私は自分ながらうかつなことをいっただけだ。あんな調子では恐らく日本に着いたときも同じことだろう。わずかなことだと思っただけだ。そうでなくても船賃は高いし、なんとか、いい方法はないものだろうか。私は真剣に考えてみた。本社にも問合せてみたが、その小麦のこぼれる量がなんと全体の5%にもなっているという。5%といえは一万トで五百ト、十万トにでもなれば五千トにもなってくるではないか。『これではいけない。こゝに小麦の取引き上、さらに検討する必要があるではないか』私はそう心の中でいい聞かせた。

全部、新しい袋を使用せず、すでに一回か、二回使ったことのある「ニアキ」「ニアキ」の古袋を使用するのが普通となっていた。なるほど、瞬間、私は自分ながらうかつなことをいっただけだ。あんな調子では恐らく日本に着いたときも同じことだろう。わずかなことだと思っただけだ。そうでなくても船賃は高いし、なんとか、いい方法はないものだろうか。私は真剣に考えてみた。本社にも問合せてみたが、その小麦のこぼれる量がなんと全体の5%にもなっているという。5%といえは一万トで五百ト、十万トにでもなれば五千トにもなってくるではないか。『これではいけない。こゝに小麦の取引き上、さらに検討する必要があるではないか』私はそう心の中でいい聞かせた。

のたと思つた。なぜなら、当時、小麦の積出たところでラチがあくわけでもないの、私もひとまず引き上りを経費の点から考えて、全部がけたが、さあ一気になつてき

# 天職に生きる

(22)

落合豊一



小麦のこぼれ 「あーなんとかならないもの  
 のを無くするために、まず最 だろうか」一つのこと、氣に  
 初に浮かんでくるのが、なにも なり出すと、なんとか解決しな  
 『ニアキ』や『ニアキ』の古い いとどうしても氣がすまない。  
 袋を使わなくても、新しい袋を 頭のなかにはこのことはかりが  
 使えばいいのではないかというこ こびりついていた。

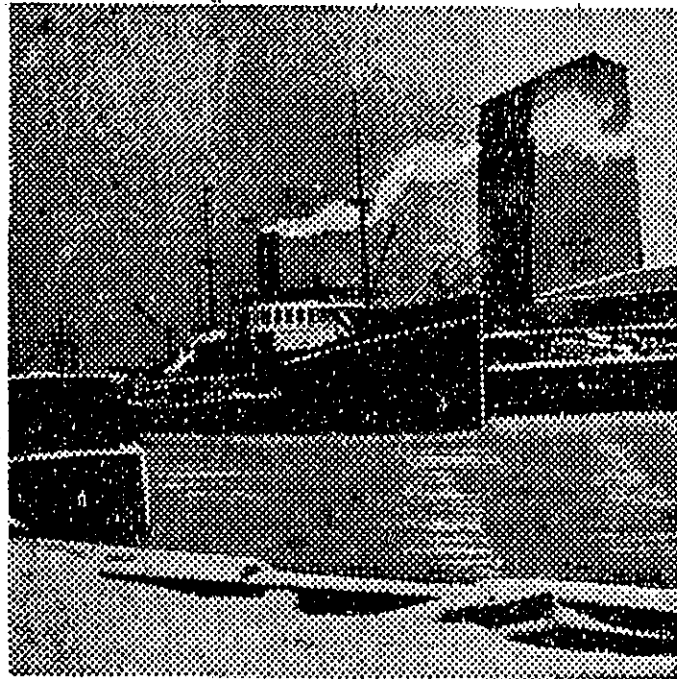
と。だが、これはダメ。第一新 事務所の窓からなんとはなし  
 しい袋だと古い袋とはくらべも に外を見やると、うすばんやり  
 のにならぬくらい費用がかさん とキリに包まれたコロンビア川  
 で、これでは荷造り費用がふえ が見えている。その川の流れに  
 る一方。どこの会社もこんなバ 沿った河岸には所せましとばか  
 かけた方法はやっていない。 りに、小麦倉庫が立ち並んでい

少年のころから、一粒の米、 た小麦の倉庫で、そこには麻袋  
 の大切さが身に試みているだけ につめた小麦がギッシリ山積ま  
 だ、たとえ小麦にしても、大切 ているのだ。  
 な食糧には足りない。あせやお すると、私はふと妙な幻覺に  
 るぞかな氣にはなれなかった。

て大声で叫んだ。

びっくりしたような所員たち

襲われた。倉庫一杯、麻袋なん の素振りを感じながら、  
 か全然ない小麦そのものばかり 私はそのまゝあとを振り返りもせ  
 のバラ積みか！マフタに浮かん ずに一目散にコロンビア川の方



ポートランドから日本向けに出港する小麦貨物船

前、ポートランド市が百万ドル の経費をかけて建築した近代の  
 なグリーンエレベーター倉庫な のだ。私は無理矢理、談じこ  
 み、とうとうこの倉庫の一部を 鈴木商店用として借りることを  
 承諾させた。そしてバラの小麦 をそこにギッシリ保管させるこ  
 とになったのである。

やがて、最初のバラ積み小麦 二千トがポートランドから横浜  
 港向け積出された。その結果が どうでくるか、なにしろ初め  
 ての試みだけにちょっと氣にな ったが、結果は上々、麻袋もい  
 らぬし、そのうえ「こぼれ」も ない。まさに一石二鳥の妙案？  
 というわけで、本社からもお賞 めのコトバもいたたくし、大い  
 に面目をほどこしたというわ けだ。

てくるではないか。

に向って車を飛ばした。

私はハッとしてわねに返った コロンビア川の流域には二つ  
 『そらだ。小麦のバラ積み。こ スバ抜けて大きな倉庫がそび  
 れだ。』私はとびよるようにし えている。この倉庫は二、三年



# 天職に生きる

(23)

落合豊一

正木契村画



小麦のバラ積 もまことにすさまじい。個人対みは予想以上の好成绩をおさめた。だが、私はこれだけで満足は出来なかった。

こんどは世界のヒノキ舞台で、思う存分小麦取引の腕を振ってみたい。そのころ、世界をマタにかけた小麦取引の舞台では、まずなるといってもユダヤ人の活躍が断然群を抜いていた。彼らには

国家がない。そして、たよれるものは自分だけ。それだけに金に対する執着心は想像以上で、明けてもくれても金、金、金。彼らの世界舞台における行動には個人では絶対だめた。だ

が、われわれには団結の力があ

は万一失敗することでもなれば、単に自分だけとか、鈴木商

世界へのヒノキ舞台にはシカゴを叩いてほかにはない!



これらの強敵に伍(ご)し

である。

この場合にしか、およそ勝負はなかつた。しかし、私には勝算十分なるとの確信にもえて

それだけに私も慎重に、ことを運んでいった。それとともに私はまず、世界の舞台に進出するには単にホ

いた。

国際貿易を開始するに当って、

そこには世界一の規模と權威を誇るシカゴ穀物取引所が厳然としてひがえていたのである。なにしろ当時の日本の小麦生産高が年額百万トであったのに、シカゴ取引所ではなんと、たった一日の取引だけで優に四、五千万トはあったというのだからその規模の大きさが想像されようというものだ。まず、このシカゴ取引所になんとしても入会しなければならぬ。ところが、そう簡単には入会出来なかった。入会するには三社以上の会員の紹介とともに、取引所の選考審査会をパスしなければならぬのだ。

# 天職に生きる (24)

## 落合豊一

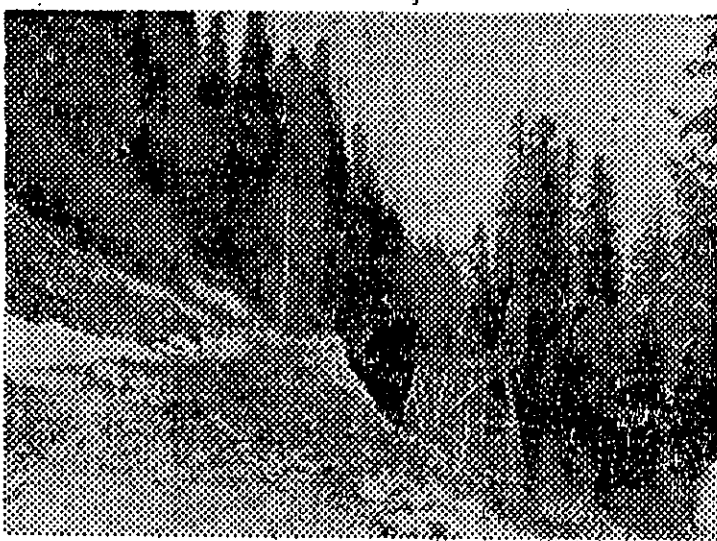


シカゴ取引所 といわなかったが、結局商売に入会するため、私はあらゆる方法を講じた。ところがなかなか「か思うようにいかなかった。そ

「そうだ。商売ガタキというものは、一面商売上の友達ということにも相違する。いっそ、小麦取引の一流商社に頼んだほ

「私は強引に、当時世界で、五指の中に数えられていたユダヤ商社のY社とU社に頼みこんだ。初めのうちばなかなかウン

らばはイギリスを中心とするヨーロッパ向けにまで小麦取引にひきかえ、小麦につく第二の世界的名産としてアメリカが誇



米太平洋沿岸一帯にはオレゴン松が無数に林立していた

ことに寒い状態で、正直にいえば、上へとクンケン伸びるばかりなのである。この付近一帯に

私はこの「オレゴン松」の取引に全力を傾注した。そして、その第一歩としてまず、米材輸

州、さらにカリフォルニア州にこの方面のボスであったからで

# 天職に生きる (25)

## 落合豊一

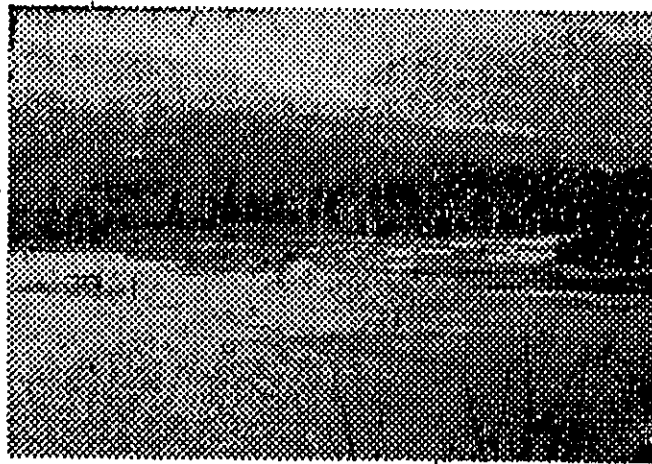


ボスに対するた。

既得も案外スムーズにいった。そして私はまもなく、オレゴン州の南西部にあり、太平洋岸の人々。少しでも余計に取引がえればそれだけ彼らのプラスになるからだ。それとともにボスたちはしたいに親日家にもなってきたようだ。後年フィート氏が日本の「勲五等」の賞をもらったことからしても、かどえるというのだが、私も大船船の出入りなんて考えもよく日本の美しい風土のことごと話すと、ボスたちは眼をかせて「フジヤマ、ワンダフ」なんて叫んでいたものだった。

安上りにできるのである。私はあらゆる反対を押しきって強引に安上りにできるのである。私はあらゆる反対を押しきって強引に

国汽船も危険をおかしながら、大きな船腹をこの寒村の港に運



初めて日本向けに木材輸出を試みた 当時の貧弱なクースベイ港

この「クースベイ」を鈴木商店の木材積出し港に指定した。その結果、国際汽船も、また帝

しんを極める木材輸出港となる 運因ともなったようだ。そして、鈴木商店の木材取扱高もふえる一方、ついには毎月平均一万吨級船で、三ばいから四ばいの木材を常時積出すようになった。一時は三井、三菱をしのいで日本一の木材取扱業者とさえいわれるようになった。だが、果してこのままでいいだろうか、単にアメリカ相手だけではないものか。否！ そのとき私の脳裏には、うっそうたる森林王国、アラスカの姿が大きく浮かび上ってきたのである。世界地図をひろげてみた。なるほど、領土的にはアメリカのものだが、見よ、経済的にはまさしく日本の勢力範囲内ではないか。

# 天職に生きる

(26)

落合豊一

正木契村画



アメリカ合衆国としては、なにも好んで遠くアラスカの木材まで引き入れる必要はない。

そんなことしなくても、手近な太平洋沿岸地区にワンサと木材があり余っているのだ。だが、日本の場合はちがう。地理的にみても北半球沿いに、北海道からだと手が届きそうなのにアラスカがひかえている。まさしく経済的には日本の勢力範囲内にある。将来はよろしくこの線にのびるべきである。私はそう信ずると、もう矢も

それとともに、付近一帯から砂金がとれるというので、ゴールド・ブームをあてこんだ。かき金組が、ぞくぞくマチにくる。そして「貴方はゴールド組じゃなさそうですね、一体なんの用件でこんな北辺くだりまでやってきたんですか」と、いかにもげけんそうな顔付きた。



く、自然の偉大な力の前に身がしびれるような思いだった。ポートランドを出発してから、それがとれるというので、ゴールド・ブームをあてこんだ。かき金組が、ぞくぞくマチにくる。そして「貴方はゴールド組じゃなさそうですね、一体なんの用件でこんな北辺くだりまでやってきたんですか」と、いかにもげけんそうな顔付きた。

少し酔っているのかな、と思いつてきたんだ。私が一部始終を話すと、なるほどといった風に大きくうなずいたが、ケルリと向き直ると、いきなり私の顔をまじまじ見つめながら「私はドクターですが、一体なんの医者が判りますか」という。

始めてみたが、彼が答えるのはいずれも「ノー」の返事ばかり。

# 天職に生きる

(27)

## 落合豊一



「一体なんの 医者なのか」私はをにか、から 間性の調 かわれているようで、少々腹立 和である』 たしくなってきた。

だが、これは私の負けた。廿 なるほど のトビラじゃないが、いくら聞 奥の夫婦生 いてみても皆目、彼の専門は判 活の幸福を らない。どうしよう私も、参っ 樂き上げる ためにはあ るいはそう した。

そして、おもむくに彼はい った可にもそんな部門の病氣 ばかりなおすのが、医者だとは 限らない。そんなことよりも 人と人生には大きな問題がある。



裏のお抱え医者で、専門はただ 夫婦間の性調和をはかるだけ。 そのほかのことには一切ノー・ タッチ。もっぱら理想的な夫婦 生活めざして、毎日のことくア

の地で妙なところで下キネを抜 かれたというしだいだった。 三週間にわたるアラスカ旅行 である。

で、私は大いに見聞をひろめ、 絶対はこの資源を日本のため 活用しなければウソだと痛感し た。同時に、アラスカの木材に 大なる希 望と夢を託 しながら、 胸をくらむ 思いでポー トラントに 帰ってきた のである。 と、薬しか ったところが だが、私は 少しの悔もな かった。

私がアメリカを去る一年前、 篠原正次氏(左)がヨーロッパ視 察を終え、ポートランドにや ってきた。(右)は私

いうことが一番大切なことかも 知れない。 彼はそういう方面の権威者、 にアメリカも広いもんだワイ、 医者といってもこんな専門医ま であるとは。まずはアラスカ いた篠原正次氏を抜てき、私は

この年、本社では穀類部の強 化充実を図り、部長に瀧州部に

# 天職に生きる

(28)

## 落合豊一



本社の穀類課長 したが、同時に私らが担当して  
として一年余り。その間、友人 いた小麦の商取引の上にも重大  
の仲介で結婚生活にもいり、新 なソゴを来すオソレが生じて  
しい人生に第一歩をフミ出して きた。

いたわけだが、ある日のこと、 というのは…これよりさき、  
そろそろひる飯ときになろうか 穀類部ではアメリカを中心とし  
という頃あい。 て世界的に小麦の大暴落がある  
との見方をとり、九、十、十一、  
地盤だー 十二月までに積出しするという

このとき、大正十二年九月一 条件で米太平洋沿岸地区から新  
日、関東大震災が起ったのであ 小麦廿数万トンのカラ商いをな  
る。やがて「東京全滅」という し、関東周辺の製粉会社にいち  
ニユースまで飛んで、まさに名 早くカラ売りの思惑をしていた  
状しがたい大混乱ぶりだった。 のである。そして、まもなく小  
鈴木商店でもとぎを移さず、 麦相場はドン、ドン下落を開  
救援物資の輸送などに万全を期 始、われわれはさてこそ予想的

中とばかり、独りほくそ笑んで  
いたワケ。  
その矢先きに突然、関東大地



鈴木商店の穀類課長として勤務中にう  
つしたものの。右から妻武子、長男力、  
私、次男祐の順。

つくようなシヨックをうけた。  
すぐさま、緊急会議が開か  
れ、とりあえず私が買手の製粉  
会社の実情を調査することにな  
った。

できたのはよかったが、それか  
ら先きがいけない。線路決壊で  
どうしても行けないという。私  
もあらかじめ不測の事態を考慮  
していたが、これには弱った。

列車が開通するまで、とて  
もじゃないが、待てない。  
どんなことがあっても、一  
刻でも早く東京に到着しな  
ければならない。

私は野良犬のように、清  
水のマチをあちこちさまよ  
った。すると、その晩、清  
水港から東京向けに緊急の  
救難物資をつんで立花丸と  
いう小型船が出帆するとい  
う耳よりなニユースをキャ  
ッチした。「これだー」私

震が起ったのである。果して小  
麦買手の製粉会社は大丈夫だろ  
うか、被害のいどは？ ケン  
コンにてきの大勝負を夢見てい  
ただけに、瞬間、背スジが凍り  
とところが、東海道は清水港ま  
あくれば三日朝、私は單身神  
戸駅を出発した。大きなリニ  
クサクに、はいるだけの食糧  
うけて、大暴雨だったのであ  
る。



# 天職に生きる (29)

落合豊一

正木契村画



名にしおう遠 船が大きく傾斜すると、ザーと州離の荒波に向って、わずかに二百ソそこそこの立花丸は出発した。

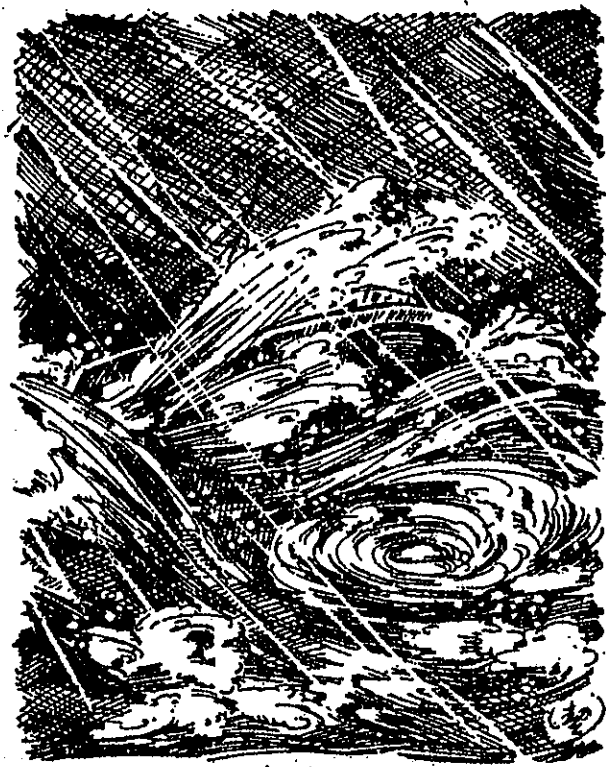
乗りこんだ連中はギリギリのせっぱつまった用件を背負ったものばかり。みんな決死の覚悟だ。

やがて、風雨はますます激しくなるばかり、船は右、左にはげしく揺れる。もう船酔いとかいう生やさしいものではない。

吐くものもなくなくなってしまったのだ。あちらを見てもこちらを見ても、みんな死んだまうにグッタリしている。そのうち、

すると、不思議な力が体内からわき上ってきた。なんの不安もオソレもなくなってきたので

ほおきなでられ、ハッと気づく。私に気がでない。果しておと、もうじいじいと夜はあけてと、くい先の製粉会社はどうなっただろうか？ 焼跡にしょんぼりたたずむ人、救援物資の運搬にこった返す人波をかきわけけるようにして、つきつきと、製粉会社を見て回ったが、幸いなるかな、ほとんど被害らしい被害はない。少々の修復を加えれば日ならずして、もとの運転が開始されそうである。



ある。同時にはげしい睡魔に襲われ、そのまま死んだように意識を失ってしまった……。

瞬間、私はこみ上げてくる喜びをどうすることもできなかった。

それから何時間ぐらいたったであろうか。ヒヤリとする風で、面の焼野原で、想像以上の大惨

そのうえ、政府が震災にもとづく緊急閣議で、小麦の輸入税を免除することを発令したため、従来以上に各製粉会社では小麦の買いつけに積極的になっているではないか。全く夢のようになりゆきである。使命は終わった―私は予想外の吉報を胸にたたんで、勇躍、本社に引き返したのである。

# 天職に生きる

(30)

## 落合豊一



製粉会社との小 関東大震災が突発して、二週  
 間ばかりのちのことである。ポ  
 ートランドといえは、私にとっ  
 ては第二のふるさとでもいう  
 べきなつかしい土地である。だ  
 が、こんどの場合はそんな感傷  
 的なユトリなんかないギリギリ  
 の立場に立たされているのだ。  
 方、最初六十噸が一ドル卅セン  
 トであったのが、とうとう一ド  
 ルを割るというありさまで、こ  
 れには産地側が売り惜しりする  
 のも、至極もつともなはなし。  
 いくら待てども一向にポートラ  
 ンド、シヤトルの積出し港に荷  
 が集ってこない。とうとう、し  
 びれを切らした本社では急ぎ私  
 をアメリカに派遣させた。

製造大震災が突発して、二週  
 間ばかりのちのことである。ポ  
 ートランドといえは、私にとっ  
 ては第二のふるさとでもいう  
 べきなつかしい土地である。だ  
 が、こんどの場合はそんな感傷  
 的なユトリなんかないギリギリ  
 の立場に立たされているのだ。  
 方、最初六十噸が一ドル卅セン  
 トであったのが、とうとう一ド  
 ルを割るというありさまで、こ  
 れには産地側が売り惜しりする  
 のも、至極もつともなはなし。  
 いくら待てども一向にポートラ  
 ンド、シヤトルの積出し港に荷  
 が集ってこない。とうとう、し  
 びれを切らした本社では急ぎ私  
 をアメリカに派遣させた。



私が小麦の買いつけで、再度ポートランドに  
 寄ったとき、出張所員たちが昔をしのんで歡  
 迎会を開いてくれた。右端に座っているのが  
 私、そのうしろに立っているのが島崎君

やとい入れたのだが、なんとこ  
 の船、一万四千トもあるという  
 超巨大船。ちなみにコロンビア  
 河上流百十哩にあるポートラ  
 ンド港にはいままでかつて九千ト  
 級の貨物  
 船を入  
 れたこ  
 とがな  
 いとい  
 われて  
 いる。  
 九千ト  
 級の船  
 の船を  
 灣船に  
 したら  
 底が川  
 ぞこに  
 余裕を持ち合せていなかった。  
 あるものはただ、一刻も早く日  
 本に向け船積みするということ  
 ばかり。  
 「エーイ、ままよ。なるよう  
 にしかならない」  
 私はむりやりでも、一万四千  
 ト級の船をこのポートランド港  
 に入港させようとして、折から  
 コロンビア河口を五十哩ばか  
 り入ったところに、停泊中だっ  
 た貨物船に、単身のりこんでい  
 った。  
 「スピードを落してでも、な  
 んとかコロンビア河を抜けられ  
 んものだろうか」  
 私は必死になって船長をくど  
 きにかかった。だが、六尺豊  
 か、ヒゲだらけの船長はただ  
 「ノー」「ノー」とかぶりを振  
 るばかり。しまいには真赤な顔  
 をして怒り出した。



# 天職に生きる

(31)

落合豊一

正木契村画



『小麦をそんなに満載してこのコロンビア河が抜けられるか』

『わしらの身体がどうなってしまうか』

しまいには船長だけでなく、そばで聞いていた船員たちまでが血相変えてシリシリつめ寄ってきた。

手に持った太いコン棒をいまでも打ちおろしそんな物すごいけんまくである。私もこれには驚いた。だが、いまさら、あとへはひかれない。

『とにかく、もう一べんだけ考え直してくれ、頼む。こんな』

正木契村画

ムリな注文するからにはヨクヨクのことなんだ。その代り酒手もうんとはずもうではないか』

すると、ヒゲだらけの船長が少し顔色を和らげて、

『入港するか、しないかは別問題として、もう一度だけ、ポートランドの港付近をしらべて見よう』といい出した……。

のゴトバはまさに、私にとっては渡りに船。すぐさま船長と、その他のおもだった船員たちをつれて、貨物船から、ランチでポートランド、棧橋に向った。

ポートランドに到着すると、



すぐさま彼らをポートランド第一のホテルに案内して、出来る限りのご馳走をふるまった。だ

だ。雨が降れば水かさが増し、あるいは一万四千トンの巨船でも満船で、航行出来るかも知れない。小麦を船艙(そう)一ぱい積んだ巨船が、増水を利用して、無事コロンビア河を脱出できた。

『雨だー』まさに天の助けか。私は踊り上ってそう叫んだ。このゴトバには、さすがの彼らもハッとしたりするように上った。そうして、その夜、しつこく雨をおかしての必死の荷役が進められたのである。その結果、小麦を船艙(そう)一ぱい積んだ巨船が、増水を利用して、無事コロンビア河を脱出できた。

なお、この貨物船が、ポートランドを出港してから、約二週間後に、名古屋港に到着したが、あまり巨大なので、なかなか港には入れられず、船長はじめ乗組員たち、非常に困感したようである。このことについては当時の地元新聞紙上にも、かつてこのような巨大船が名古屋に入ったことはないとの記事が出ていたと記憶する。当時、私はそのときの乗組員たちの苦労がうかがわれて、なんだかあいすまぬような気持がしたものだ。

# 天職に生きる

(32)

落合豊一

正木契村画



日本向け小麦の第一便積出しでの重大使命を終えて、大正十  
 二について、さらに第二便、第二年もそろそろ暮れようという  
 三便と、とうとう、三ヶ月間、十二月下旬に、勇躍、本社に帰  
 ポートランドに滞在するうち、  
 ったわけだが、どういもの  
 当初計画していた小麦廿万トを、か、上役も同僚も一向に喜んで  
 ほとんど残らず、積出すことが、はくれない。それどころか、サ  
 ッパリ元気がない。いな会社全  
 できた。

だが、私は第一便の苦勞にこ  
 りて、一度と二万四千トなどと  
 ういう向う見ず？な巨船は使用し  
 なかった。雇ったのは雨が降ら  
 なかった。だが、そのうち、し  
 なくても自由にコロンビア河が  
 航行できるような七、八千ト級  
 の貨物船だったというわけだ。  
 こうして、私はポートランド

社と自他ともに許していた鈴木  
 商店がなんと一歩一歩、破局へ

の道をたどりつつあったので  
 ある。

さん下の五十いくつの工場は  
 整理しようにも整理出来ず、赤  
 早鈴木商店の倒産も時間の問題



字はふえる一方。加えて代金の  
 回収はいよいよコゲつき、よう  
 やく第一次世界大戦後の不況の  
 アランが、はげしく鈴木商店の  
 上にもおおいかぶさってきた

のだ。

大正十三年もくれ、さらに十  
 の悲壮な心中は、とてもでない  
 がコトバにはあらわせない。

に社運はばん回されない。否、  
 ますます左前になるばかり、最  
 だが、われわれは最後まで闘  
 うことを固く心に誓っていた。  
 そして、私ら海外派遣から帰っ  
 てきた同志たちはとくにつつとっ

て、真剣に社運ばん回の対策、  
 さらには今後の方針などを検討  
 し合った。その当時のつどいの  
 会を「二月会」と名づけたが、  
 確か同志たちの数は廿名内外だ  
 った。この「二月会」はいまに  
 至るも持続し、必ず年に一回  
 か二回、その当時のメンバーが  
 集って、ありし昔の懐旧談に花  
 を咲かせているが、帝国人絹会  
 長大原晋三、三菱レーヨン社長  
 賀集益蔵、神鋼電気社長中井謙  
 雄、帝人製機社長小野三郎諸氏  
 はみなこの「二月会」のメンバ  
 ーであった。

# 天職に生きる

(33)

落合 豊一

正木 契 村画



「三月会」も 食わんがため必死だ。経営者側  
ンパー懸命の社運は今回対策 と、働くもの双方の深刻なかつ  
も、このころに至っては最早と とうは破局という運命の二字を  
うにもならず、ついに昭和二年 はさんで、しだいに陰翳の度を  
四月、鈴木商店は倒産した。 加えていった。

二千名にのぼる社員たちも同 幸か、不幸か、このとき私は  
時に失業者として、世の荒波に 廿名からなる対策委員会の委員  
放り出されたわけだが、ここで に選ばれたのである。

彼らにとって最後のソソミとな 委員たちは鈴木岩治郎社長に  
ったのはもちろん退職金問題。 かけ合った。だが、社長はただ  
ところが、会社が破産したいま 「ないソデはふれぬではない  
となつては全然わん出の余地も か」というばかり。

ない。 そこで、われわれも「もし金  
しかし、彼らも生きんがため、 があればどうする。われわれで

金をねん出すればそれを退職金 当の退職金が支給された。  
として支給してもらってもいい 私も四千円でいどの退職金を  
か」と念を押した。サアそれ もらったが、なにしろ、その当

やがて、最高一人当り五千元 たものだ。  
まで、平均にして三、四千円見

私はそのころ、倒産後の残務

整理で毎日会社に出ていたが  
「一つ大金がころがりこんだ  
し、こころで気分転換としゃれ  
ようじゃないか」ということ  
で、同僚五人とともに、八月上  
旬富士登山を試みた。

御殿場あたりで一泊、朝モヤ

から全支店ならびに出張所員に 時の四千円といえは生れてこの  
までゲキをとばして、コゲつき かなた握ったこともないような大  
代金の回収に全員ヤッキ、とう 金。なんだか失業したというこ  
とう想像していた以上の資金、 とも、このときばかりは忘れた  
を集めることができた。 ようで、結構愉快な気分を味っ



ついてわれわれはウィスキー片  
手に飲んで登り、登っては飲  
みで、大いに意気けんこう、八  
合目あたりへきたまではよか  
ったんだが、そのあとがいけな  
い。いままでワイワイはしゃい  
でいた友人たちが、しだいに静  
かになっていくではないか。ハ  
ーン失業男の富士登山だけに  
いささか感傷的になってきたの  
かなと思っていると、どうだ、私  
の心臓までドキン、ドキンと激  
しく波打ってくるではないか。

# 天職に生きる (34)

## 落合豊一

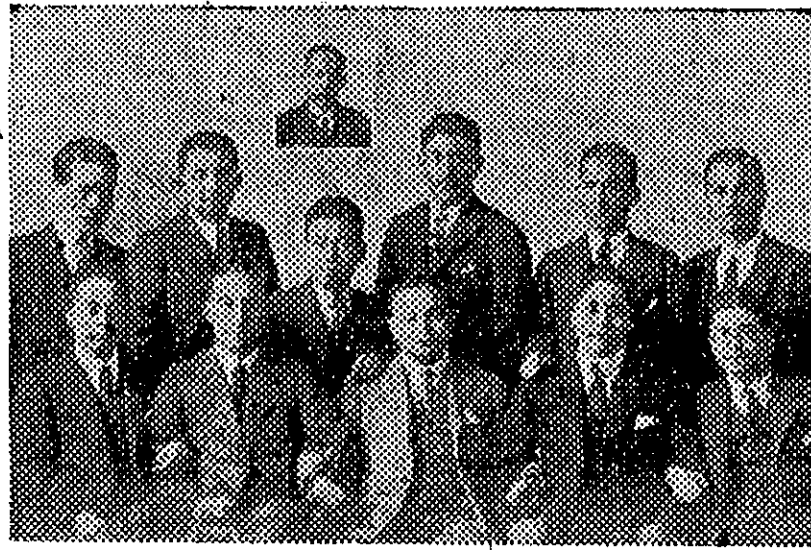


富士山の八合 目あたりになると、氣圧の関係で非常に厚苦しくなるんだが、さうとも知らぬものだからわれわれの表情も深刻。そのうろたえ以上にアルコールが回っているんだからたまらない。いやその苦しいことといったら。連中すっかり参ってしまった。

だが、頂上にたどりついて初めて氣圧の関係だと知ったときの一歩のキョトンとした顔つき。しばらくは互いに顔見合わせて、笑いが止らなかつたというしだいだった。

それとともにはるかに下界を見下ろしたときには、失業だと

だ。とくに小妻取引などという事は一朝一夕ではなならない。これは、無償でこの研究資料を提供しようではないかと、三菱商に全部はとれないが、なんとか三、四名だけにしてくれ」ということで、篠原毅類部長以下、豪州の中川、シヤトルの島崎、ニューヨークの森本四氏が入社することになった。そして、その翌日、われわれ同志たちは、それぞれの往く道にしたがって、いさぎよくけつ別しようとして、有馬温泉のオク、三田で松茸狩りをするかたわら、大いにおのみ、かつ歌って、全員へべれけ。とうとう私は山の中のひ



鈴木商店の解散直前、毅類部員たちとともに、記念写真におよんだ。前列右から二人目が私、後列左から二人目島崎、三人目中川氏、ワケ内は篠原部長

私はほう大な研究資料を作成するとともに、これらの海外派遣員十名を残らず採用してくれ

問題は起ってくる。結局「三菱にも人あり、組織あり。そんな三、四名だけにしてくれ」ということで、篠原毅類部長以下、豪州の中川、シヤトルの島崎、ニューヨークの森本四氏が入社することになった。そして、その翌日、われわれ同志たちは、それぞれの往く道にしたがって、いさぎよくけつ別しようとして、有馬温泉のオク、三田で松茸狩りをするかたわら、大いにおのみ、かつ歌って、全員へべれけ。とうとう私は山の中のひ

私は自分だけが一番最後になっても、残った連中をなんとか就職させようと、日本製粉KKや、その他の会社にあっせんするうち、突然、鈴木商店の後継会社として大阪に設立された日商株式会社から、入社しないか」とのコトバをうけた。

# 天職に生きる

(35)

落合豊一

正木契村画



昭和三年二月 八日、日商株式会社が資本金百  
 万円で設立されると同時に、私  
 は神戸支店の穀類担当者として  
 入社した。さきの鈴木商店が買  
 易と工場を同時に経営し失敗し  
 た例から、日商はあくまで買易  
 一点張り。その当時の社員は本  
 店と、神戸並びに東京支店全部  
 を集めても四十名たらずで、二  
 千名以上の社員をかゝえていた  
 鈴木商店とはくらべものになら  
 ぬほど、スケールの小さいもの  
 であつた。だが、私たちはいつ  
 かは一流の貿易商社に発展させ  
 うか。

ようとの合コトバを胸に、闘志

あたかも、デフレ時代、不景気

のドン底だっただけに私も死物

狂い。ほとんど毎日のように深

夜海外からはいってくる電報、

情報などと取組んで、小麦を中

心とした穀類の買付けに、売り

に、血の出るような労苦を払

った。

一年三百六十五日、殆んど息

つくヒマもない毎日の連続だ。

そんな重苦しい日々が一体何

月、いや何年つづいたことだろ

うか。

そのころ、いな正確にいえば  
 昭和六年、大森内閣が誕生した  
 ときのことであるが、この年、

を行った。国内はもとより、朝  
 鮮、満州にまで買いの手を伸ば  
 した。案のじょう、物価はドン  
 ドン上る一方だ。私は小麦だけ  
 に止らず、買える物資はなんで



大森内閣誕生、いな正確にいえば

政府は金輸出の再禁止をなし、  
 も買えとばかり、あらゆる方面  
 ために再びインフレのキザシが  
 現れ出してきたのである。

某から「かんしょでんぷんがあ  
 るかどうか」との連絡が届いて  
 した。鹿兒島にいる出張員  
 とばかり、いっかを買いつこう  
 としない。こちらがシロウトと  
 みて、彼らなめてかかってきた  
 というわけだ。

# 天職に生きる

(36)

落合豊一

正木契村画



クロウト筋た んぶん 価格がどんどん下り出  
ちの足なみはなかなかガッチリ し、おまけに「でんぶん」の水  
したも。さんさんこちらをじ 分までも蒸発して目方も減る一  
らしておいで、最後のどたん場 方。一年の間になんと言ふばか  
で思いきりたとうというコン りも減ったではないか。私もこ  
タンらしい。私もこれには弱っ れには驚いた。とうとう、手放す  
た。あまく見ていただけに、と ことに相成ったのだが、いまさ  
んでもないことになってしまっ ちクロウト筋に売れるのも樂腹だ  
たと思っただが、もうこうなっ して、同じ損して売れるのなら郷里  
は私も意地とならざるをえな の徳島のアメ屋？さんにでもさ  
い。「絶対クロウト筋なんか ばいたほうが喜ばれるのでない  
売るものか」とばかり、なんと かと、おりよく買手にでていた  
一年余りも倉庫の中に、じっと 日本製船（日本齋瀬の前身）に  
入ればなしたまま、ねぼって 在庫品全部を二ペんに売りさば  
いた。ところが、かんじんの「で いてしまった。

うになったし、このことが縁に  
なつて、以後日本製船にとつて  
は日商が一番大きな取引先とな  
ったようだ。同時に従来まで  
の九州で「でんぶん」買いつ  
ば授業料がいろいろと同じよう  
きすがこのときは相当な損  
をしたわけだが、まあ何事に  
よらず、はじめて字牌うとすれ



港に運び入れるという極めて合  
理的な方法に改めた。  
その結果、従来とは比較にな  
らぬほど運賃も安上りで、で  
んぶん 取引きでは断然、他社  
をpushして優位に立つことがで  
きた。

私は「でんぶん」買いつけに  
当って、つねに国際貿易のやり  
方でフェアをモットーとして  
いたので、これまでとかく大阪  
商人に、にえ湯ばかり飲まされ  
ていた九州の製造業者たちも日  
を追って日商との取引きを望む  
ようになり、昭和十年ごろには  
九州一円はもろんのこと、四  
国の愛媛から中国すじまでほと  
んどの「でんぶん」製造屋と取  
引が進み、関西の「でんぶん」  
の四〇%までをしめるようにな  
った。だが、私の本意は国内ば  
かりの取引きでなく、あくまで  
国際貿易にあった。

に、この「でんぶん」取引にも  
最初は授業料？が必襲だったワ  
ケである。  
しかし、翌年からはもう授業  
料を払わずとも結構かせげるよ  
ら船で徳島に運んでいたとい  
うようなまわりくどい取引きを  
切やめにして、二百ソの直航船  
をやどい、直接鹿児島産地で  
仕入れて、それをそのまま徳島



# 天職に生きる

(37)

落合豊一

正木 契 村 画



「でんぶん」で従前通りのヨリをもどすこと  
 の取引がしたいに軌道にのるに  
 はさして離事でもなかつたよ  
 うだ。  
 實際易への情熱にかり立てられ  
 るような思いだった。

たゞ、この場合も初めて国際  
 貿易をてがけるのと選って、過  
 六、幾らかでも小妻部門の海外  
 取引にたずさわっていたことが  
 非常に参考になった。たとえば  
 イギリス、インド、その他の海  
 外商社とのつながりにしても、  
 なんとえ小妻と「でんぶん」の違  
 いこそあれ、同じ穀類部門とし

て従前通りのヨリをもどすこと  
 はさして離事でもなかつたよ  
 うだ。  
 私は主としてジャワ、シンガ  
 ポールで、タピオカ(芋の一種)

でんぶんを買いつけ、これを織  
 物用のノリならびに食料用とし  
 てインド方面に輸出した。

こうして、私と「でんぶん」  
 とのつながりはますます深まる  
 一方、あけてもくれてもたゞ世  
 界のヒノキ舞台ばかりをユメ見  
 てきた私にとって、たとえ小  
 妻より幾らかスケールが小さく

とも、この国際貿易への復帰は  
 なんにもまさる喜びだった。だ  
 が、このユメも長くはつづかな  
 かった。なぜならやがて大東亜

わが国食糧自給政策の一環とし  
 て、イモの増産から、さらにこ  
 れを「でんぶん」化するのに必  
 死になったのと同じように：  
 私は昭和十六年六月、全国で  
 んぶん配給組合の理事長にえら

このイモからアルコールを作  
 り、これを航空燃料の一部とし  
 ても利用したというのだから、  
 当時の政府の力の入れ方も想像  
 以上といえよう。



そのころ北海道は美深に、破  
 産したアメ会社の売り物がある  
 とのニュースを耳にした。北海  
 道庁が補助金まで出してパレイ  
 ショでんぶんからアメを作って  
 いたものだが、赤字につく赤字  
 で、とうとうお手上げになっ  
 てしまったもの。

戦争がボツ筈、食糧の輸入、輸  
 出も日とともに困難となってい  
 きたからである。  
 しかし、私の「でんぶん」に  
 対する執着心は依然として変ら  
 なかった。ちょうど、戦時中の  
 急務ともいふべきで、ひいては

それだけに、いつか面白い手  
 はつかない。だが、私はこのア  
 メ会社をこのまま朽ちさせてし  
 まう手はないと考えた。なんと  
 か合理的な運営方法がありそう  
 なもんだと、なぜだか、妙にこ  
 のことばかりが頭にこびりつい  
 てはなれない。

# 天職に生きる

(38)

落合豊一

正本契村画



美深のアメ会でも、絶対もうかる手段がある」と。

社がなぜ倒産したか、一番大きな原因は何か。私はその原因をもう一度、調べ直してみた。すなわち、アメの原料である「でんぶん」をまず乾燥させる際に、九州、四国ならびに本州でやっている天日乾燥とちがって、寒い北海道ではこれを火力で乾燥させ、結局はその設備、燃料費に食われたということがわかった。

ただ従来までのやり方と違ったことは、乾燥でんぶんを使わず、いきなり「生でんぶん」をて立派なアメが製造され、そのうえ、乾燥させる必要がなくなったので、燃料費をうんと軽減することができ、わずか一年間のうちに当時の金で四十万円ばかりの収益を上げ、大成功をお



さめた。いまでもこの会社は「日商でんぶん化学工場」として存続している。

「でんぶん」の利用範囲は極めて大きく、食糧、アメ用はも切って乾燥させると、「でんぶん」がとれるのである。とうとう、地方の学童たちまで大わらわでこの球根を掘りつつけるようになった。やがてこの「彼岸ばな」まで、ドンドン値上りを見せ、これまた統制されるにいたった。こうなると全く私たちの商売もあがったり。イヤーもうどうにも動きがとれなくなってしまった。

だが、私はあきらめなかった。いつの場合でもなんとか創意工夫をこらせばつねに打開の途はあると信じて疑わなかった。私は一策を考へ出した。

使用したことが。…最初のう

「でんぶん」の利用範囲は極めて大きく、食糧、アメ用はも切って乾燥させると、「でんぶん」がとれるのである。とうとう、地方の学童たちまで大わらわでこの球根を掘りつつけるようになった。やがてこの「彼岸ばな」まで、ドンドン値上りを見せ、これまた統制されるにいたった。こうなると全く私たちの商売もあがったり。イヤーもうどうにも動きがとれなくなってしまった。



# 天職に生きる

(39)

## 落合豊一



「彼岸ばな」して、これをアルコールにつけ  
からとれる「でんぷん」は繊維  
用のノリとして、私たちは取扱  
っていた。ところが大日本製薬  
が、さかんにこの「彼岸ばな」  
を買おうとしているではない  
か、「クスリと彼岸ばな」一体  
なんの関係があるんだろうか？  
「彼岸ばな」を融通してや  
ってもよいが、一体なにに使う  
んだ」

「これはよいことを知った」  
私は一つの妙案？を考えつい  
だ。いくら統制ばかりといっ  
ても、さすがにこのエッセンスだ  
けは全然関係なかつたのだ。そ  
こで在庫の「彼岸ばな」の売り  
込みを全部中止して、これをそ  
のまゝ大日本製薬に売った。た  
だし、球根の中のエッセンス分  
だけ、繊維工場に売りさばかれてい  
ったのだから、全くこれ以上  
まい話はな  
い。そのう  
え、これな  
ら「法」に  
もふれず、  
この一石二  
鳥の妙案？  
のおかげで  
会社も大い  
にもうかつ  
たというワ  
ケだ。

「でんぷん」と「ノ  
リ」という  
部のコニヤクを買ってし  
まった。あとで判ったことだ  
が、スプのしろうとが大玉を買  
ったというので、随分話題に  
なったようだ。

「でんぷん」として、ドンドン  
売って、こんどは立派な  
大東亜戦争もようやく末期に近  
づくというところである。  
突然、徳島の美馬郡半田町一  
田で、コニヤクの荒粉(コニ  
ヤク玉を切干にしたもの)  
があるが、どうかとの商談をう  
けたのである。このコニヤク  
荒粉についてはキンタマの砂お  
ろしとして妙効？があるとい  
うことぐらいは知っていたが、実  
のところ、それ以外、なんらの  
専門知識も持ち合わせてなかつ  
た。だが私は統制されていな  
いということ、郷里のコニヤ  
クであるということが妙に魅力  
を感じて、あっさり、廿万円全  
部のコニヤクを買ってし  
まった。あとで判ったことだ  
が、スプのしろうとが大玉を買  
ったというので、随分話題に  
なったようだ。

「でんぷん」として、ドンドン  
売って、こんどは立派な  
大東亜戦争もようやく末期に近  
づくというところである。  
突然、徳島の美馬郡半田町一  
田で、コニヤクの荒粉(コニ  
ヤク玉を切干にしたもの)  
があるが、どうかとの商談をう  
けたのである。このコニヤク  
荒粉についてはキンタマの砂お  
ろしとして妙効？があるとい  
うことぐらいは知っていたが、実  
のところ、それ以外、なんらの  
専門知識も持ち合わせてなかつ  
た。だが私は統制されていな  
いということ、郷里のコニヤ  
クであるということが妙に魅力  
を感じて、あっさり、廿万円全  
部のコニヤクを買ってし  
まった。あとで判ったことだ  
が、スプのしろうとが大玉を買  
ったというので、随分話題に  
なったようだ。



私が日商専務になってまもないころ、社  
内でレクリエーションがあり、開会のコ  
トバをのべているところ

「でんぷん」として、ドンドン  
売って、こんどは立派な  
大東亜戦争もようやく末期に近  
づくというところである。  
突然、徳島の美馬郡半田町一  
田で、コニヤクの荒粉(コニ  
ヤク玉を切干にしたもの)  
があるが、どうかとの商談をう  
けたのである。このコニヤク  
荒粉についてはキンタマの砂お  
ろしとして妙効？があるとい  
うことぐらいは知っていたが、実  
のところ、それ以外、なんらの  
専門知識も持ち合わせてなかつ  
た。だが私は統制されていな  
いということ、郷里のコニヤ  
クであるということが妙に魅力  
を感じて、あっさり、廿万円全  
部のコニヤクを買ってし  
まった。あとで判ったことだ  
が、スプのしろうとが大玉を買  
ったというので、随分話題に  
なったようだ。

「でんぷん」として、ドンドン  
売って、こんどは立派な  
大東亜戦争もようやく末期に近  
づくというところである。  
突然、徳島の美馬郡半田町一  
田で、コニヤクの荒粉(コニ  
ヤク玉を切干にしたもの)  
があるが、どうかとの商談をう  
けたのである。このコニヤク  
荒粉についてはキンタマの砂お  
ろしとして妙効？があるとい  
うことぐらいは知っていたが、実  
のところ、それ以外、なんらの  
専門知識も持ち合わせてなかつ  
た。だが私は統制されていな  
いということ、郷里のコニヤ  
クであるということが妙に魅力  
を感じて、あっさり、廿万円全  
部のコニヤクを買ってし  
まった。あとで判ったことだ  
が、スプのしろうとが大玉を買  
ったというので、随分話題に  
なったようだ。

「でんぷん」として、ドンドン  
売って、こんどは立派な  
大東亜戦争もようやく末期に近  
づくというところである。  
突然、徳島の美馬郡半田町一  
田で、コニヤクの荒粉(コニ  
ヤク玉を切干にしたもの)  
があるが、どうかとの商談をう  
けたのである。このコニヤク  
荒粉についてはキンタマの砂お  
ろしとして妙効？があるとい  
うことぐらいは知っていたが、実  
のところ、それ以外、なんらの  
専門知識も持ち合わせてなかつ  
た。だが私は統制されていな  
いということ、郷里のコニヤ  
クであるということが妙に魅力  
を感じて、あっさり、廿万円全  
部のコニヤクを買ってし  
まった。あとで判ったことだ  
が、スプのしろうとが大玉を買  
ったというので、随分話題に  
なったようだ。

# 天職に生きる

(40)

落合豊一

正木契村画



スプの素人が「え」とばかり、とうとう製粉す  
 コンニヤクを大量に買いこんだることに相成ったのだが、しょ  
 とあって、大阪商人たちはさきせんはスプのしろうとの悲し  
 の「でんぶん」買いつけに見せさ。なんとタルク（石材）製造  
 たと同じような商魂たくましさ。屋で直接、ひきウスを借りて製  
 で、案のじょう、一せいにたた粉したもんだからたまらない。  
 き落しにかかってきた。こちら 売りさばいたコンニヤク屋か  
 も意地だ、そう簡単に安値でたらは、全然弾力性もないもの売  
 たかれてはたまったものでない。ってけしからん。コンニヤクに  
 と、サテがんばったものの、時ならぬではないか」と物すこい  
 日がたつにつれ、いささか心細抗議をうけるし、さんさんの失  
 くなってきた。エイイっそ敗だった。

のこ、これを製粉して、直接 専門家にしらべてもらったと  
 コンニヤク製造家に売っちまころ、石ウスでかんじんのコン

ニヤクのマンナン（分子）を  
 チャクチャクに粉碎してしまい、  
 これでは弾力性がなくなるのも

功のもととなり、徳島、高知を  
 「気球爆弾」に切っても切れぬ  
 はじめ、広島、長野、群馬、埼  
 玉、茨城などの産地から大量に  
 買い集めて大々的に製粉し、内  
 地はもとより、瀟州、上海など  
 にも輸出、一躍コンニヤク界の

「気球爆弾」についてはいま  
 さらいうまでもないが、戦争末  
 期の昭和十八年秋ころ、大きな  
 気球に時限爆弾を仕掛けてこれ  
 を日本から亜成層圏をこえて、  
 アメリカにまでとばそうとい  
 うもの。この気球は和紙をはりあ  
 わせ、その表面にコンニヤクの  
 りを塗布するのである。ところが  
 がそのコンニヤク玉もほとんど  
 が食糧用に回されるとあっては  
 軍当局が計画するコンニヤクの  
 りの大量生産にはほど遠い。あ  
 げくの果てが購物入りで、コン  
 ニヤクや「い」と懸命に探し回  
 る羽目となった。

そのとき、もと国際汽船の幹  
 部で、マニラにも駐在していた  
 という三浦玄三君が耳よりな情  
 報を提供してきた。



もつともだという。なるほど、  
 花形になってしまった。  
 いまがいままでマンナンなんて  
 そして、このコンニヤクが戦  
 局の進むにつれこんどはコンニ  
 全然知らずにやったとは、およ  
 ヤクのりの大量生産にまで發展  
 ヤクが身の懸かさには愛想もコ  
 し、ついには敗色濃い日本の最  
 後、この失敗もやがては成  
 後の切り札？として登場した

# 獅士立志傳

## 落合豊一氏の巻

# 天職に生きる

(41)



### 落合豊一

三浦君のい はさすがの三浦君もホトホト参  
う情報とは「コンニャクなら心 ったらしい。あとでわかったこ  
配ない。フィリピンに行けば野 とだが、山ろくとか傾斜地で陽  
生のものがいくらでも密生して の当らぬ場所。そのうえ気候涼  
いる」ということだ。

すぐさまこのことは陸軍省に でない「マンナン」の多いネ  
報告され、時を移さず三浦君は バリのあるコンニャクはとれな  
軍用機でマニラに飛んだ。なる い。ましてやフィリピンなど熱  
ほど、フィリピンの村や、丘の 帯地域に優秀なコンニャクのと  
草むらにはおびただしいコンニ れる道理はないのだが、これも  
ャク芋が繁殖していた。ところが 知らぬが仏。すべてはあとの祭  
がそれを採集して処理してみた りだった。

ともかくも、こうした曲折を へただけに「気球爆弾」のノリ  
特有のネバリが全然ない。毎 つけも、原料難から容易に進ま  
日、毎日採集してテストをくり なかったようだ。そのうえかん  
返して見たが同じこと。これに



毎月一回、定期的に社内運動場集って社歌をうたうことになっている（前列左から二人目が私）

じんの「気球爆弾」の反響もサ  
ンバリ現われてこない。陸軍の

いたというんだから我彼の美  
力の差がうかがわれるというも  
のである。

昭和廿年五月、ベルリン陥落

とともに

いよいよ

日本の敗

色も濃い

というこ

ろ、当時

神戸支店

長の職に

あった私

はたれも

がしり込

みをする

東京支店

長を自ら

買って出

な決心でもあったわけだ。私は  
神戸を離れるに当って、家族全  
部を中国山脈の南側、宮本武蔵  
の出生地で有名な岡山県の大原  
町に移すことにした。そして、  
私は東京の地に赴任した。だ  
が、一週間をへた五月廿三日  
と、一日おいた廿五日の大空襲  
で支店は跡かたもなく粉砕され  
てしまった。幸い私ら支店員は  
地下廿尺までも掘り下げた堅固  
な防空壕のおかげで、どうにか  
一命だけは助かったのだが。  
私はあび叫喚のちまたと化し  
た大東京の下真中で、このとき  
ほどつくづく日本の将来が案ぜ  
られたことはなかった。一体  
日本はこのままどうなるのか、  
大落の底にでもつき落されたよ  
うな不安と、一種いうにいえぬ  
さびしさでもあった。

失望したことももちろんのこと  
であった。だが、このとき海の  
彼方のアメリカではすでに恐る  
べき原子爆弾の試作に成功して  
るで死地にとびこむような悲壯

☆ ☆

# 天職に生きる

(42)

## 落合豊一



廿年の八月十日 “ヤミ”をすれば下に働く連中五日。ついに大東亜戦争は終った。同時に全く收拾のつかない不安と混乱も増大してきた。日本経済の立ち直りもまた極めて困難のようだ。世にいう“ヤミ”の横行が目に残りだしたのもこのころである。だが当時、専務の職にあった私は“ヤミ”だけは絶対会社の方針として禁止した。同業者間の一部では私のこのヤミ禁止に対して全くアホウ扱いにするものもあった。『あんなバカ正直で、こんな混乱した世の中が渡っていけるか』と。だが私は絶対自分の信念をまげなかった。会社が

落ちた。このことは十年を経過したいまになって、ハッキリ現われてきた。十年前“ヤミ”をやったものは結局は会社なんてメチャメチャ。ついに倒産の憂目にあっているのだ。正しきものは勝つ。昭和廿九年十一月、私は日商社長に就任した際、このことだけは固く心にキザミつけ

思えば長かりし六十年の歲月。だが過ぎ去ったいまになってみるとまるできりのうのこの

謝の気持ちをきき上げたい。私という存在もすべてはこの社会的恩恵の中にあつたればこそ……た。そのためにもなんらかの形でこの恩恵に対してこ恩報しをし

る。ということのみに人生の感謝と喜びをつねに感ずるのである。



“天職に生きることのみが私の最大の喜びである、……現在の私”

ようになっているのことが思い出されてくる。なつかしい限りを通過して、まず國家に寄与する。それとともに私を育ててくれた両親や祖母、そして社会的なわち天から授かった己が職場環境。その他ありとあらゆるすべての存在に私は心から感ずる。そして私は“天職に生きる”

最後にいささか私ごとによれて汗顔の至りだが、この記録をつより出してまもないとき、突然、父助右衛門の死を知った。なんとという悲しみ。さきに母と祖母を失い、いままたかけがえのない父を失う。それもあまりの出来事に全くなすすべを知らなかった。いくたび途中で筆を折ろうとしたことが。父の死という悲しみの中では私の記録などというものは全く無価値にひとい。そのような気持だ。だが私はすべてを忘れて、一度とった筆をさらに進めることのみを努力した。つねつね最後までやり抜け」と口くせのようにいっていた亡き父のトバと、そして、その面影をじつとしのびながら……

(おわり)